

向原 III 遺跡

—横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集—

2007

群馬県安中市教育委員会

口絵



M-1号溝 全景



M-1号溝 土層断面

序

向原Ⅲ遺跡のある中野谷地区は碓氷川の南側、妙義山の麓に広がる平坦地が続く横野台地にあります。この横野台地はこんにゃくを中心とした畑作地帯であり、緑豊かな自然との共存した地域であります。そして、最近では、県営畠地帯総合整備事業、工業団地造成、道路建設等の開発によって整備され、県内でも有数の工業と農業とが融和した地帯として生まれ変わりつつあります。こうした開発に伴い多くの遺跡が発見され、発掘調査を実施してきたところ、縄文時代の集落跡や古代の牧場跡を中心とした遺跡が広がる地域として、この地に人々の営みが続けられてきたことが明らかとなりました。

今回報告する向原Ⅲ遺跡は、安中市土地開発公社が計画する横野平工業団地（B団地）分譲事業に伴い発掘調査されました。調査の結果、中野谷地区に広がる古代の牧場を区画するための大きな溝の一部や同時期の集落跡も発見されました。

本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査に従事していただいた方々、調査にご協力いただいた各関係機関をはじめとする皆様には感謝申し上げる次第です。

平成19年11月

安中市教育委員会
教育長 中澤 四郎

例　　言

- 1 本書は安中市土地開発公社が計画した横野平工業団地（B団地）分譲事業に伴う向原Ⅲ遺跡（略称G-47）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 向原Ⅲ遺跡は安中市中野谷字向原・真光寺原・明戸地内に所在する。
- 3 確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成18年度に安中市教育委員会が実施し、本調査及び遺物整理は原因者負担により、平成18・19年度に安中市教育委員会が直営で実施した。
- 4 確認調査及び発掘調査、資料整理は、安中市教育委員会学習の森文化財係主任（文化財保護主事）井上慎也が担当した。
- 5 確認調査は平成18年10月3日より10月16日まで実施した。発掘調査は平成18年10月23日より12月15日までの間、実施した。資料整理は調査終了後より平成19年3月23日までの間、断続的に実施した。報告書作成は平成19年4月16日より11月30日までの間、実施した。
- 6 本書の編集・執筆は井上が行った。なお、V-1については三浦京子氏（（有）前橋文化財研究所）が執筆した。主な作業分担は以下のとおりである。
 - 遺構図作成・トレース、各種挿図作成、デジタル編集：井上、吉澤栄子、大月圭子、菅生陽子
 - 土器分類、台帳作成、復元：吉澤、中島けさよ
 - その他遺物分類、観察表作成：井上、菅生
 - 遺物実測、観察表作成：（有）前橋文化財研究所（土器）、井上・大月（土器の一部、他遺物）
 - 各種データ入力、作成：吉澤、大月、菅生
 - 遺構・遺物写真データ作成、編集：菅生、大月
- 7 遺構の写真撮影は井上が行った。航空写真撮影及び遺構実測用ビデオ（デジタル）撮影は（株）テクノブランディングに委託した。また、現場で原寸大に転写したビニール図面の遺構実測用写真はスナガ環境測設（株）に委託した。遺物の写真撮影の一部は（有）前橋文化財研究所に委託した。
- 8 基準杭測量、グリッドの設定、調査区平面図作成は（株）コイデに委託した。
- 9 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方面にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

三浦京子　折館伸二　大工原　豊　松田　猛　井上昌美　金子正人　板垣　宏　柴田直樹
湯本今朝夫　（株）ユーキ建設

11 調査組織（平成18・19年度）

教育長 中澤四郎

教育部長 佐藤伸太郎

學習の森所長（参事）大野孝一（平成18年度）

（課長）小島成公

文化財係長（課長補佐）藤巻正勝（事務総括）

主査 蜂須賀まゆみ（経理担当）

主査（文化財保護主事）深町 真

主査（文化財保護主事）壁 伸明

主査 新井雅彦

主査（文化財保護主事）千田茂雄

主任（文化財保護主事）井上慎也（発掘調査・整理担当）

調査参加者

大月圭子 清水洋一 菅生陽子 多胡 静 田島せい子 田村信子 遠間宰吉 中島けさよ

萩原静夫 林 知曠 半田あい 丸岡民子 吉澤栄子

凡　例

- 遺構の実測図は1/80を基本としたが、遺構の大きさにより1/40、1/160とした。
- 遺構図中の北マークは磁北である。なお、座標は2002年4月改正以前の日本測地系を使用した。本文中で使用した地図は国土地理院発行の地形図「松井田」（1/25,000）、安中市都市計画地図（1/2,500）である。
- 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

土器：1/4	（実測図脇の●は須恵器を示す）	石器：1/4
鉄製品・石製品・土製品：1/2	一部の石製品：1/4	
- 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準：「新版標土色帖」による。	
色調<：より明るい方向を示す（暗<明）	
しまり、粘性 ○：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし	
混入物の量 ○：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%）	
※：若干（1～3%）	
- 混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）
Y P：板鼻黄色輕石
- ピットの深さ ○ 0～19cm ○ 20～39cm ■ 40～59cm ● 60cm以上

6 遺物重量分布及び 土器

遺物分布図マーク

	10g	100g	1000g
土師器系	●	●	●
土師器灰系	■	■	■
灰陶器	○	○	○
その他	▲	▲	▲

石器

遺物名	記号
縞物石	+
麻石	田
砂綿車	◎
砂石	●
白石	■
黑石	○
混入物	▽

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 調査の経緯	1	IV 検出された遺構と遺物	15
1 調査に至る経過	1	1 遺跡の概要	15
2 調査の経過	1	2 繩文時代の遺構と遺物	16
II 調査の方法	3	3 古墳時代の遺構と遺物	17
1 発掘調査の手順	3	4 奈良時代以降の遺構と遺物	18
2 遺構調査の方法	3	V 成果と問題点	38
3 資料整理の方法	4	1 奈良時代の土器について	38
III 遺跡の地理的・歴史的環境	6	2 牧闘連遺構群について	40
1 地理的環境	6	遺物観察表	46
2 歴史的環境	6	遺構観察表	48
3 層序	12	写真図版	

挿図目次

第 1 図 調査区設定図	2	第 19 図 M-2号・M-3号溝実測図	32
第 2 図 道路位置図	7	第 20 図 M-4号・M-5号溝実測図	33
第 3 図 道路と周辺道路分布図	8	第 21 図 H-1号・H-2号住居址出土土器実測図	34
第 4 図 調査区域図	11	第 22 図 H-2号・H-3号・H-4号・H-5号住居址	
第 5 図 土壠断面模式図・土解説図	12	出土土器実測図	35
第 6 図 向原Ⅲ遺跡全体図	13・14	第 23 図 H-6号・H-7号住居址出土土器実測図	36
第 7 図 繩文時代 土器・石器実測図	16	第 24 図 古墳・奈良時代 鉄製品・石器・石製品・土製品実測図	37
第 8 図 H-1号住居址実測図	21	第 25 図 土器器表分類図	39
第 9 図 H-2号住居址実測図	22	第 26 図 中野谷地区遺跡群 牧闘連遺構(1)	42
第 10 図 H-3号住居址実測図	23	第 27 図 中野谷地区遺跡群 牧闘連遺構(2)	43
第 11 図 H-4号住居址実測図	24	第 28 図 中野谷地区遺跡群 牧闘連遺構全図	44
第 12 図 H-5号住居址実測図	25		
第 13 図 H-6号住居址実測図	26		
第 14 図 H-7号住居址・D-1号土坑・炉実測図	27	表 目 次	
第 15 図 M-1～5号溝位置図	28	第 1 表 道路一覧表	9
第 16 図 M-1号溝実測図(1)	29	第 2 表 遺物観察表(1)	46
第 17 図 M-1号溝実測図(2)	30	第 3 表 遺物観察表(2)	47
第 18 図 M-1号溝実測図(3)	31	第 4 表 遺物観察表(3)	48
		第 5 表 遺構観察表(住居址・溝)	48

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

平成18年7月21日、安中市土地開発公社（市公社）から横野平工業団地（B団地）分譲予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。該当場所は周知の埋蔵文化財包蔵地内にあり、開発については市教育委員会と協議が必要であることを伝えた。同年7月24日、市公社へ事業地内の土木工事等に係る意見書を提出し、予定地域の工事に先立ち、埋蔵文化財の状況を把握するための確認調査を実施することになった。同年7月25日、市公社から市教育委員会へ確認調査の依頼があり、同年10月3日～16日の間、市教育委員会で確認調査を実施した。調査の結果、古代の住居址と古代の牧に関連する区画溝が発見され、事業区域内に埋蔵文化財が存在することが判明した。同年10月17日、市公社へ確認調査の結果について伝え、発見された埋蔵文化財の取り扱いについて協議することを伝えた。しかし、工業団地の計画を変更することは困難な状況であるとのことから、工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。同年10月20日、必要書類（法94条第1項通知）が出され、同年10月23日付で市公社と市教育委員会の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。

2 調査の経過

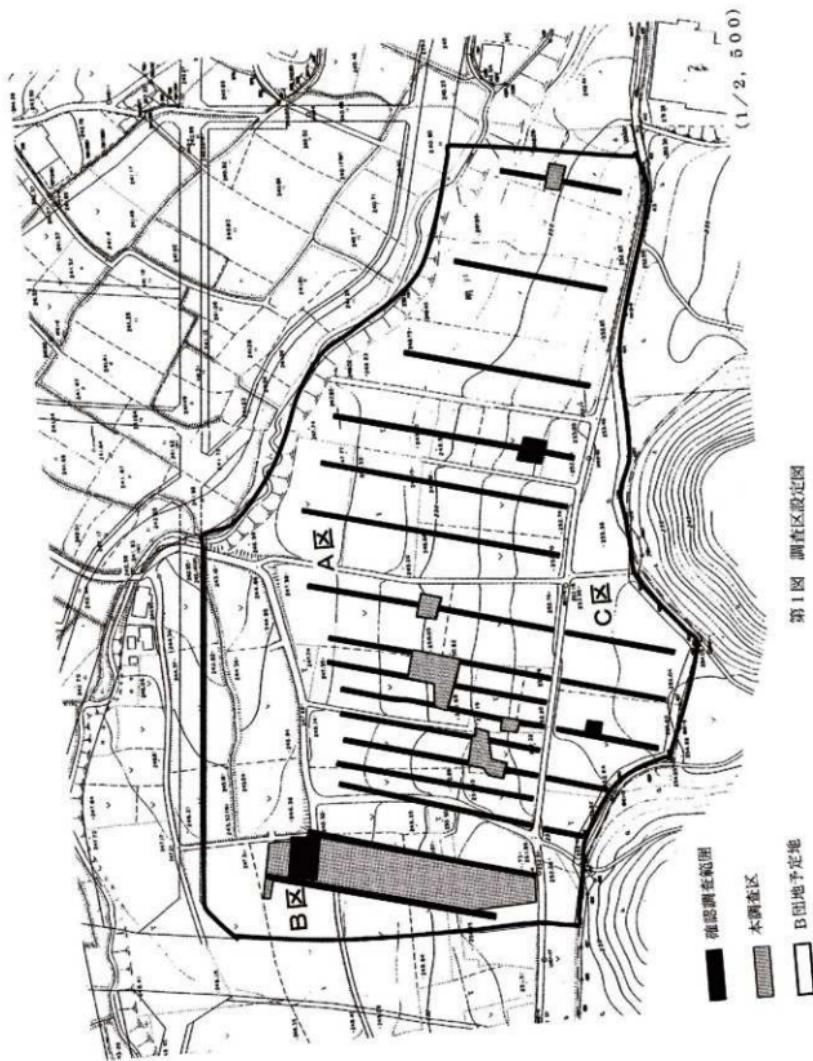
（1）発掘調査の経過

横野平工業団地（B団地）の分譲事業に先立ち、確認調査を平成18年10月3日から10月16日までの間、実施した。周辺地域は先の土地改良事業及び県道建設工事に伴い遺跡の調査が実施されている場所であり、本事業区域内にも遺跡が存在することが予想された。確認調査は、事業面積45,000m²を対象とし、トレンチを21本設定して行った。調査の結果、西半分で古代の住居址と牧関連遺構である大溝が検出され、集落が存在することが明らかとなった。発掘調査は、確認調査の結果をもとに調査地が広範囲にわたることから調査区をA・B・C区に分けた。牧の溝が確認された部分は、全体を把握するために可能な限り面的調査を実施することにし、遺構の密度が低い西半分については、トレンチ調査で確認された遺構を中心に調査区を括げていく方法を採用した。遺構の密度が西半分に比べ低いと予想される東半分については、確認調査のみを実施した。また、南側に突出した部分（富岡市側）では、古墳（下高田衣沢1号墳）が存在することから、周囲等の古墳に関連する遺構の存在が予想されたため、範囲確認調査を行った。しかし、今回の開発区域が、当初の古墳の予想範囲を超えた場所であることと予想以上に土層の削平が及んでおり、遺構を確認することができなかつたことにより、今回の開発区域まで古墳の範囲が及んでいなかったと判断し、本調査の対象からは除外した。

（2）資料整理の経過

資料整理は、平成18年度と平成19年度に実施した。平成18年度は、発掘調査終了後に基礎整理を中心とし、遺物の洗浄・注記・接合・分類及び遺物台帳作成等の遺物整理、図面の修正・整理・遺構実測

第1圖 調査区設定図



用写真撮影、各種台帳の整理、写真整理を中心に行つた。平成19年度は、図面トレース、データ集計、遺物実測・トレース等、遺物写真撮影、写真図版作成等の資料整理を実施し、並行して報告書作成をデジタル編集により行つた。

(井上)

II 調査の方法

1 発掘調査の手順

発掘調査の方法及び手順は安中市中野谷地区遺跡群等の調査で採用している独自の方法を基本としている。詳細については、『大下原遺跡・吉田原遺跡』(1993)、『中野谷松原遺跡遺構編』(1996)を参照されたい。

発掘調査は調査区の設定後、バックホー(0.7m³)で遺構確認面(Ⅲ層下部からⅣ層上面)まで掘削し、人力でジョレンを用いて遺構確認を行つた。表土掘削後、基準杭測量及びグリッド設定を行つた。グリッドは、土地改良事業に伴う発掘調査で設定したものに組み込むために同じグリッドを使用した。グリッドの名称は北西隅を起点とし、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字の組み合わせとした。検出された遺構については、遺構毎に遺構略称と番号を付け、遺構の内容に応じた精査を行い、土層断面状況及び完掘した遺構をリバーサル及び白黒フィルム(35mm)で写真撮影を行つた。遺構精査終了後、ラジコンヘリコプターで遺跡の全景写真と遺構測量用のデジタルビデオ撮影を行い、遺構実測用に出力した画像をもとに現地で遺構図を作成し、遺構の高さを記録した。

2 遺構調査の方法

(1) 積穴住居址の調査方法

積穴住居址の調査は、「分層16分割法」を行つた。遺構の範囲を確定後、住居址の中心を東西南北に直交する2本のベルトを設定する(ポイントは赤)。さらに、その間に16分割するための補助点を設定し、16分割区をつくる(ポイントは黄)。南北方向のベルトに平行してサブトレーンチを設定し、土層を分層しながら床面まで人力で掘削する。住居址の深さと大きさが決まった後、分層毎に掘り下げを行う。遺物の取り上げは16分割を基本とし、上層の遺物は取り上げ、床直及び下層の遺物はそのまま残し遺構を掘り下げる。竈、土坑、ピット等の関連遺構の遺物は遺構毎に取り上げる。ベルトを残しながら床面まで精査が終了した後、土層断面写真を撮影し、土層説明を記録する。土層断面図は「ビニール転写法」を用いて原寸大に転写する。土層の記録が完了した後、ベルトを削す。床面を精査し柱穴(ピット)、貯蔵穴(土坑)を確認し精査する。平行して竈の精査も実施する。竈は半分を精査し、土層堆積状況を記録した後、完掘する。竈平面図の一部については、デジタルカメラで垂直撮影し、微細図を作成した。

(2) その他の遺構の調査方法

土坑は範囲を確認後半裁し、土層断面図を作成後、残りを精査し完掘した。

溝は、牧闘連遺構である大溝とそれ以外に分け、任意に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを行った。大溝の覆土掘削には、担当者の立ち会いのもと底面近くまでバックホーを使用し、その後は人力で精査した。大溝北側部分は湧水のため、安全を考慮し、掘り下げを断念し、水面付近までの調査とした。

(3) 遺構測量、遺物の記録の方法

遺構の平面図：全ての遺構の平面図は、遺構完掘後、ラジコンヘリコプターでデジタルビデオカメラによる空撮をし、撮影した画像をパソコンに入力して画像の歪み補正等を行い、1/40で出力したものを見現地で遺構の細部を確認しながらマイラーにトレースする方法で作成。平面図にはレベル値を記録し、ベンチマークとレベルの眼高から遺構の標高を算出できるようにした。また、遺構の断面図を作成するために必要に応じてレベルを記録し、数値から断面図が復元できるようにした。なお、作業の進行状況に応じて、空撮に間に合わない遺構の測量については、平板測量も併用した。

土層断面図・遺構微細図：幅2mの農業用ビニールを使用して、遺構及びその断面にあて原寸大でマジックで転写する方法（「ビニール転写法」）で作成した。

遺物の出土記録：遺構出土の遺物は、分割区毎、層別に取り上げ、遺物出土量を袋の大きさで相対的量（大量・多量・少量・微量）に置き換え、カードに記録し分布図を作成した。なお、土坑、小規模な遺構の覆土中のものは「覆土一括」で取り上げ、出土量を記録した。

（井上）

3 資料整理の方法

(1) 遺構図整理の方法

住居址：住居址の時期は下層及び竈の遺物によって時期を決定した。重複のある場合は土層堆積状況と遺物出土状況により新旧の判断をした。報告書には各住居址の平面図、土層断面図、遺構断面図、遺物分布図、竈・土坑等の平面・断面図、土層説明表、住居址観察表を掲載した。平面図には柱穴（ピット）の深さを示し、配列が分かるようにした。

土坑：全ての土坑については、特定の機能を示さないで用いる「土坑」の用語で統一した。土坑の中には「墓」「貯蔵用」「陥穴」と考えられるものもふくまれるが、明確に機能を区別できるものは少ない。時期及び機能については特定するのが難しいため、本報告では形態と出土遺物の性格から判断することにした。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、観察表を掲載した。

溝：遺構の時期については、確認面及び覆土中の遺物から判断した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、観察表を掲載した。

(2) 遺物整理の方法

土器の整理：土器は時代毎に大別し、それぞれを器種毎に分類した。土器は「量」を把握するために重量を区、層毎に記録し、16分割を基本とした分布図を作成した。奈良時代の土器は、廃棄により覆土中（1、2層出土遺物）から出土したものと床面直上及び住居に伴う遺棄（3層及び竈等の遺構出土）されたものとに区分し、後者を一括性をもつ土器群として捉えて検討した。

土器の分類は、破片と復元できる個体に分け、破片については器種毎に重量を記録した。復元できる

個体については重量を記録した後、復元率によってランク付け（A～D）を行い、個体台帳を作成し、器種、接合状態、重量を記録した。土器の実測については、住居別、器種組成を優先し、完形もしくは完形に近いものについては極力図示に努めた。遺物の出土量を記録することは、破片についての情報も活用でき、遺構全体での遺物の出土傾向が把握できる点で有効性をもつと判断した。報告書には遺構毎に土器群の特徴が検討できるものを優先して掲載した。実測した土器については、個別に観察表を作成した。また、土器群の特徴及び編年的位置付けについての所見を掲載した。

その他の遺物の整理：遺物の種類毎に分類し、各台帳（観察表）を作成した。石器については安中市の分類基準に準じて分類した。

（4）写真整理の方法

現地で撮影した写真については、リバーサル（カラー）、白黒、ネガ（カラー）別にファイルし、アルバムを作成した。また、リバーサル写真是フォトCDに記録し、その後の保管（保存）・活用を考慮し、デジタル化した。

遺構写真図版は、画像を全てデジタル化し、遺構毎のフォルダを作成した。使用カットは遺構全景、遺構土層堆積状況（セクション）、遺物出土状況を基本とし、必要に応じてカットを追加した。デジタル画像は全てカラーとした。

遺物写真是、全てデジタルカメラによって撮影（一部委託）し、遺構写真と同様、画像をデジタル化した。

遺物写真図版は、実測した土器及びその他の遺物について全て単体で撮影した。

（5）デジタル編集の方法

遺構図及び遺物実測図については、デジタル機器（パソコン等）を使用して編集した。遺構図については、原図を修正した後、スキャナーで図面を取り込み、デジタルトレースで挿図を作成した。

手書きのトレースや地図については、スキャナーで取り込み、画像を編集し、挿図を作成した。

遺物観察表は表計算ソフトを使用して作成した。写真図版はフォトCD化した画像データを使用して、報告に必要な写真を選別し、編集した。

（井上）

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。市の西部から北部にかけては山地が広がる。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側には並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には、河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部、人見地区）、中位段丘（安中・原市地区）、上位段丘（横野地区）が存在する。

向原Ⅲ遺跡は安中市中野谷字向原、真光寺原、明戸地内に所在する。本遺跡が存在する中野谷地区は、安中市南部、碓氷川河岸段丘の上位段丘面に存在する。この台地は「横野台地」とも呼ばれ、幾筋もの細長い台地が形成され、その低地部分には湧水点も存在し、小河川が流れる。現状では起伏は緩く、平坦地が続いた地形である。向原Ⅲ遺跡は、南側が急峻な崖、北側は猫沢川に面する北斜面に位置する。遺跡の標高は246～251mである。

（井上）

2 歴史的環境

中野谷地区は、大規模土地改良事業、工業団地、道路建設等の開発に伴う発掘調査で、地区のほぼ全域の発掘調査が実施されている。調査の結果、中野谷地区には縄文時代の大規模な集落遺跡と古代の牧関連遺構群が存在する地域として特徴づけられる。向原遺跡は、今回の調査を含め3地点が調査されている。それぞれ地点での遺跡の性格は異なり、向原遺跡（平成12年度調査）では、縄文時代前期の土坑群が確認され、黒曜石の原石及び石匙等、土器がまとめて出土した土坑（諸磯b式期）等が発見された。向原Ⅱ遺跡（平成12・13年度調査）では、縄文時代前期中葉から後葉の集落址（住居址4軒、土坑）と古代の集落址（奈良住居址2軒）が確認された。また、向原Ⅲ遺跡の南側にある丘陵張出部には、横穴式石室をもつ前方後円墳と推定される下高田衣沢1号墳（富岡市）が存在する。真光寺原遺跡、西向原遺跡、下高田遺跡群（富岡市）では、古代牧関連遺構である東西に延びる区画溝が確認された。

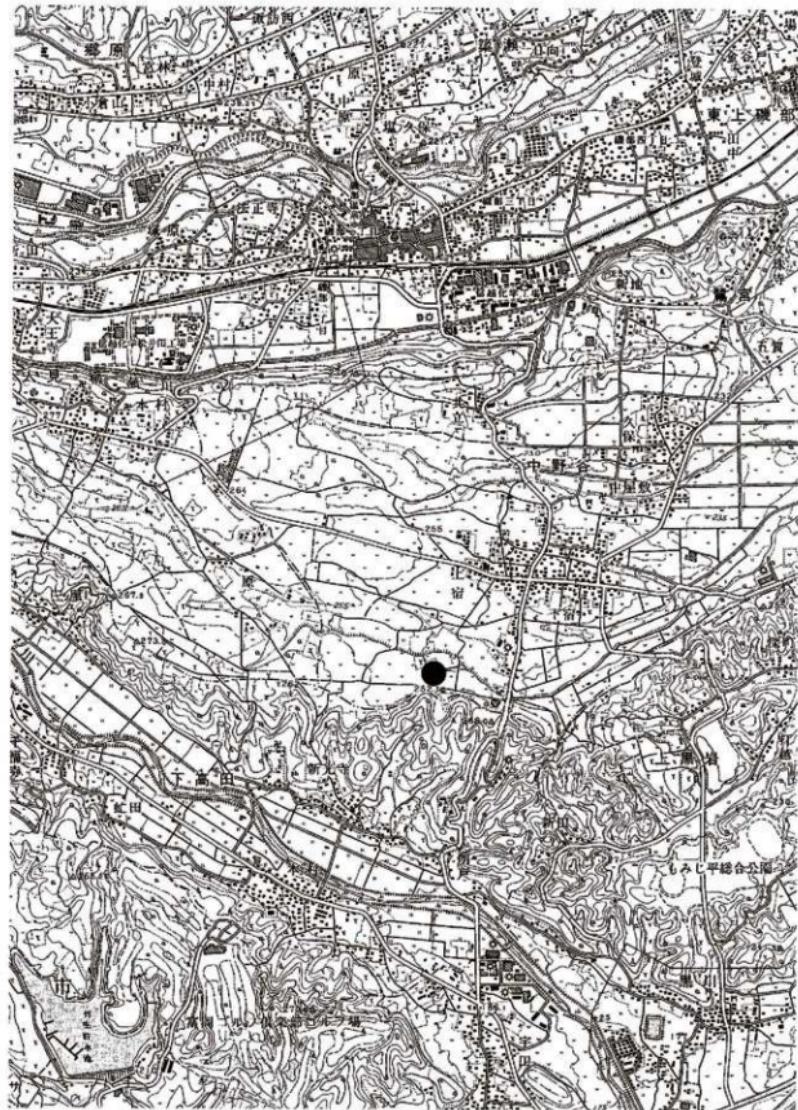
ここでは、中野谷地区を中心とした各時代について概観する。

旧石器時代

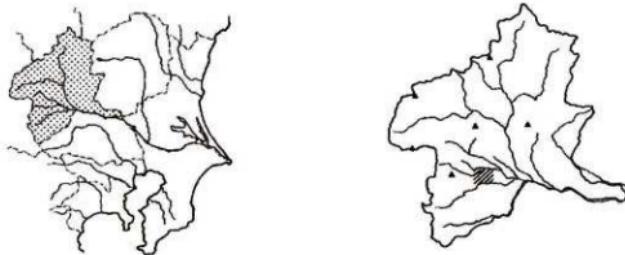
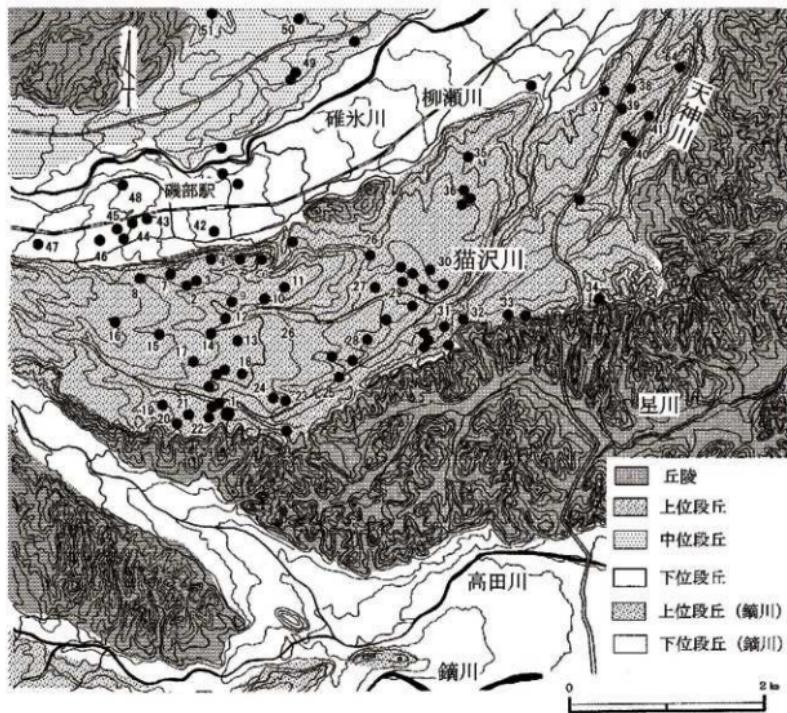
中野谷松原遺跡でA T下位（暗色帶）の石器が出土している。注連引原Ⅱ遺跡では黒曜石製の尖頭器が出土している。ローム層の堆積状況からこの時代の遺跡は少ない。

縄文時代

草創期の遺跡は、遺物のみを出土するものがほとんどで少ない。金井谷戸遺跡では押型文土器群が検出されている。前期前葉以降、遺跡が増加し、住居址が列状に並ぶ中原遺跡、有尾・黒浜式期から諸磯b式期にかけての拠点的集落である中野谷松原遺跡、中期前葉から中葉の大規模環状集落である砂押遺跡、中期終末から後期初頭にかけての柄鏡形敷石住居址群を主体とする集落の中島I・II遺跡、後期後半の配石遺構である大道南遺跡、後期後半から晩期まで継続する祭祀遺構の天神原遺跡等がある。縄文



第2図 遺跡位置図(国土地理院「松井田」1/25,000)



第3図 遺跡と周辺遺跡分布図

遺跡名	旧	縄文				弥生			古墳			奈良	平安	中世	近世	備考	
		草	早	前	中	後	晚	*	中	後	前						
1 向原 I・II・III			○					*			○	○	○	○	○		古代段階遷遺構
2 加賀塚			○	○	○	*					○	○	○				古墳聚落、將太斯古墳
3 加賀塚古墳											○						東鏡野 6 号墳、時期不明
4 鏡野 2 号墳											○						円墳、竪穴系
5 鏡野 3 号墳											○						前方後円墳か、竪穴系
6 向山											○						古代段
7 中野谷原											○						弥生中期集落、古墳聚落、古代牧
8 上上原											○						弥生・古墳聚落、古代牧
9 天神林			○	△							○						縄文初期聚落
10 天神原			○	○	○	○	○				○						縄文後期配石、古代段治
11 中野谷松原	△	*		○	○	○	○				○						縄文前期聚落
12 中原 I・II			○	○	○	○	○				○						縄文・古墳聚落
13 砂押 I・II・III			○	○	○	○	○				○						縄文・初期鐵器聚落、古代牧
14 砂押原			○								○						縄文灰石、古墳聚落
15 人足東原																	吉ヶ谷系土器群
16 上原																	古代牧
17 大瀬南・大瀬南 II			○	○													縄文後・後期集落、配石
18 土塚南			△														古代牧
19 人足大谷津			○	△													古墳前期聚落、古代牧
20 下高田原道路跡群			○	○													古代段階遷遺跡群
21 西向原			○														縄文前期聚落、古代牧
22 直見寺原			△														古代牧
23 畦山			○	△							△	○					縄文初期聚落、古代牧
24 柏久田			*	*							△	○					古代牧
25 下宮東	*			○	△	○				○							古墳前期聚落、古代牧
26 北東・堤下			○	△							○						古墳後期聚落
27 下篠田			△	*							△						古墳・古代鐵冶
28 中原		△						*	*	*	△						縄文前期聚落、古代牧
29 落合・落合Ⅱ	*		*	*	*						△						古代牧
30 平塚			*								○						○ 古墳群（円墳）
31 江差引原			○	○				△	○		○						弥生前～中期聚落
32 江差引原 II	*		○	*	△	△	○	△	○	○							弥生前～中期聚落、古代牧
33 大上			○					○									弥生中期聚落
34 網輝古墳																	門墳、竪穴系、石製模造品
35 萩野平・吹上			△	○	○	○				○	○						古墳～古代聚落
36 上ノ久保			○	○	○					○	○						弥生・古墳聚落
37 諸原ノ木										○	○						弥生・古墳聚落
38 下原・寶神										○	○						弥生・古墳聚落
39 破壊										○	○						古墳聚落、石製模造品
40 日出後原										○							古墳崩塌・古墳崩壊
41 野毛良										*							古墳崩落
42 山田田・久保田										○							方形圓溝墓
43 諸若辺																	古代集落（諸若辺）
44 西置・西新井			△	○				*			○	○	○				古墳～古代集落（諸若辺）
45 人足北原																	△ 古墳～古代聚落（諸若辺）
46 松井田工藝田地							*			○							古墳～古代聚落（諸若辺）
47 人足大王寺																	△ 古墳～古代聚落（諸若辺）
48 諸若古墳群																	十數基の小円墳群
49 開墾二子塚古墳																	前方後円墳、竪穴系、石製模造品
50 清水 I～M			○	△							○	○	○	○	○		古墳～古代聚落、中世土器燒成窯
51 横木塚			○	○							○	○	○	○	○		古墳～古代聚落

○：大規模な道路（集落路・古墳道等） ○：中規模な道路（住居址・牧間通等）

△：小規模な道路（土塁・溝等） *：遺物が出土した道路

第1表 遺跡一覧表

時代の遺跡は、低地を望む斜面部あるいは台地平坦部に存在する。向原遺跡では、前期中葉の住居址と前期後半の土坑群が確認されている。

弥生時代

集落遺跡は、前期末で注連引原遺跡、中期前半で注連引原Ⅱ遺跡、大上遺跡、原遺跡で確認されている。当該期の遺構は県内でも少なく、一地域で集中して集落が発見される例は珍しい。この時期は、在地の土器群に磨消縄文系及び条痕文系土器が共存する。また、縄文的な石器群が主体であり、大陸系磨製石器は少ない。中期後半以降の遺跡は市内では少なく、後期前半になると上北原遺跡で柳描文系土器群の時期に、磨製石器の製作が行われている。後期後半では大下原遺跡、原遺跡で住居址が確認されているが集落規模は小さい。弥生時代中期以前の遺跡は縄文時代の遺跡と立地が類似するが、集落の占地が台地あるいは崖端部に存在する特徴が認められる。一方、中期後半以降では、積極的に集落が形成されない傾向が認められる。

古墳時代

吉ヶ谷系土器群が共存する前期初頭の集落遺跡は、人見東原遺跡、人見大谷津遺跡で確認されている。前期から中期初頭にかけての集落遺跡では、中島遺跡、下宿東遺跡、天神原遺跡等で住居址が確認されている。中期以降の集落遺跡は、今まで少ない地域とされてきたが、加賀塚遺跡をはじめ北堤・堤下遺跡、中島Ⅰ遺跡、原遺跡、上北原遺跡等で確認されている。集落の占地は北堤・堤下遺跡を除き、加賀塚遺跡周辺部に存在する。古墳時代の集落は継続性が認められず、短期間に形成、廃絶する傾向がある。加賀塚遺跡では、滑石製石製模造品の製作址が確認されている。古墳では、加賀塚遺跡の北側には中期の磯部2号墳、磯部3号墳が存在する。磯部3号墳では石製模造品が出土している。終末期の古墳は加賀塚遺跡で確認されている。猫沢川右岸には、前方後円墳と推定される下高田衣沢Ⅰ号墳が存在し、下高田原遺跡群では、古墳が確認されている。

奈良・平安時代

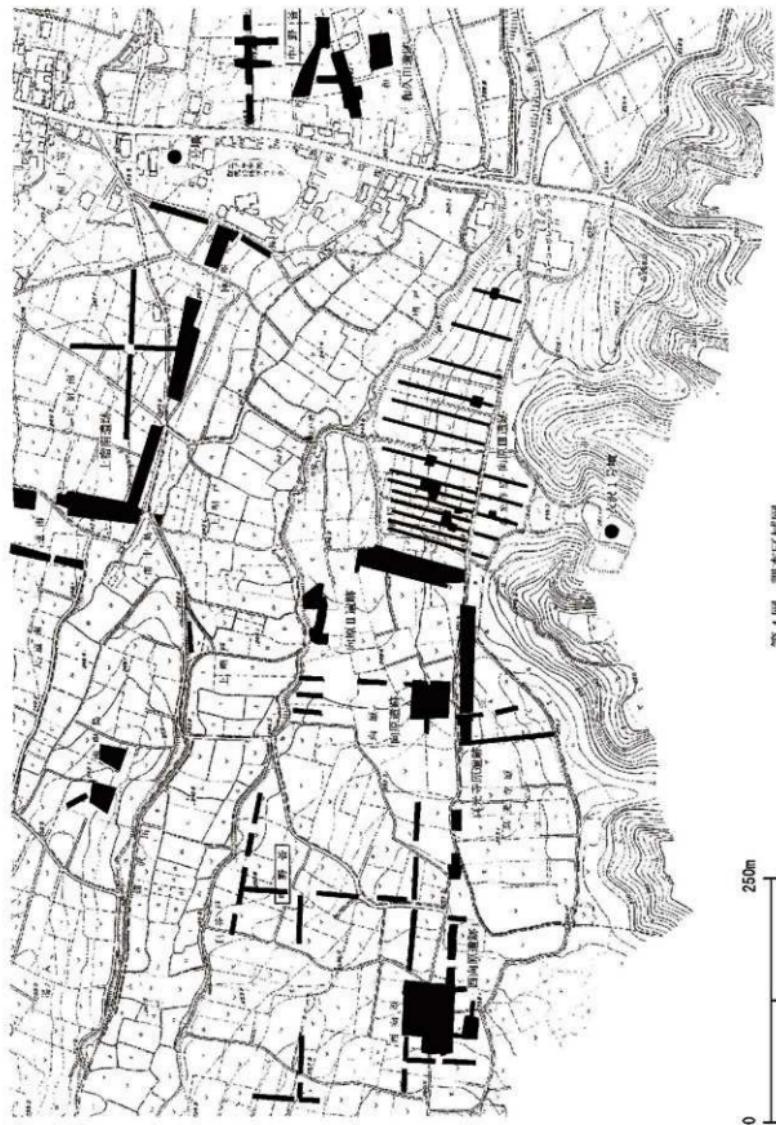
奈良・平安時代の遺構として特徴的なのが、牧に関連する遺構群である。この牧は古代上野国に置かれた官牧ではなく、記録にはない私牧であると考えられる。主な遺構は中野谷地区全域を区画する大溝であり、地形によって幾つかの単位で検出され、中原遺跡、下宿東遺跡、上宿南遺跡、原遺跡、上北原遺跡、天神原遺跡、西向原遺跡、真光寺原遺跡等で確認されている。また、関連して鍛冶工房跡が天神原遺跡、下塙田遺跡で確認されている。中原遺跡では区画溝と併設する溜井が確認されている。台地下の下位段丘面には大王寺地区遺跡群（松井田工業団遺跡、西裏・下新井遺跡等）では、古墳時代以降から継続する古代「磯部郷」に関係する伝統的集落が存在する。この遺跡群では鍛冶関連遺構や官衙的色彩の強い掘立柱建物群等が確認されており、牧の經營に関与した遺跡群と推定される。原遺跡では、炭焼土坑が多数検出されている。西向原遺跡に隣接する下高田遺跡群では、古代の小規模集落址が調査され、区画溝が西へ延びていることが確認されている。

中世以降

中世以降の遺跡は少なく、遺構としては溝及び土坑等が検出される例が多い。これらの遺構は覆土中に浅間B軽石を含むことから、12世紀以降の所産と思われる。中野谷神社及び清元寺付近には、近世に秋本氏が構えた陣屋跡が残る。

（井上）

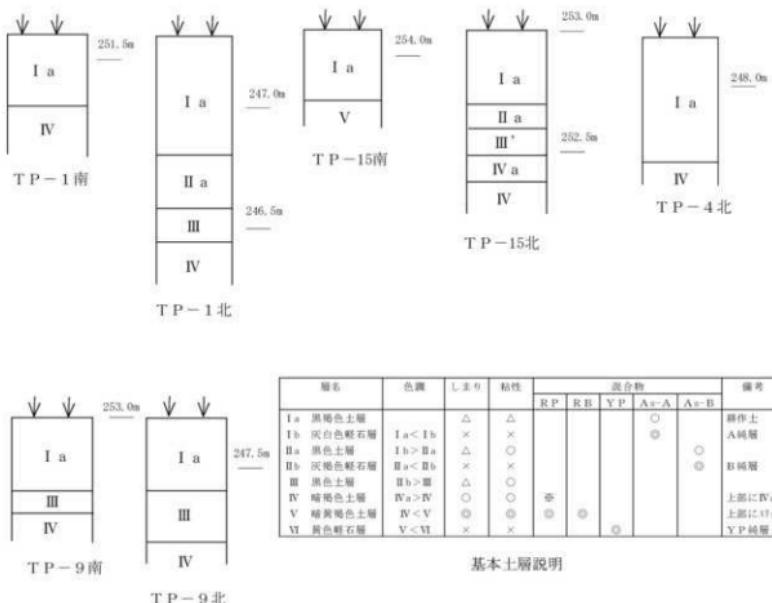
第4圖 調查區域圖



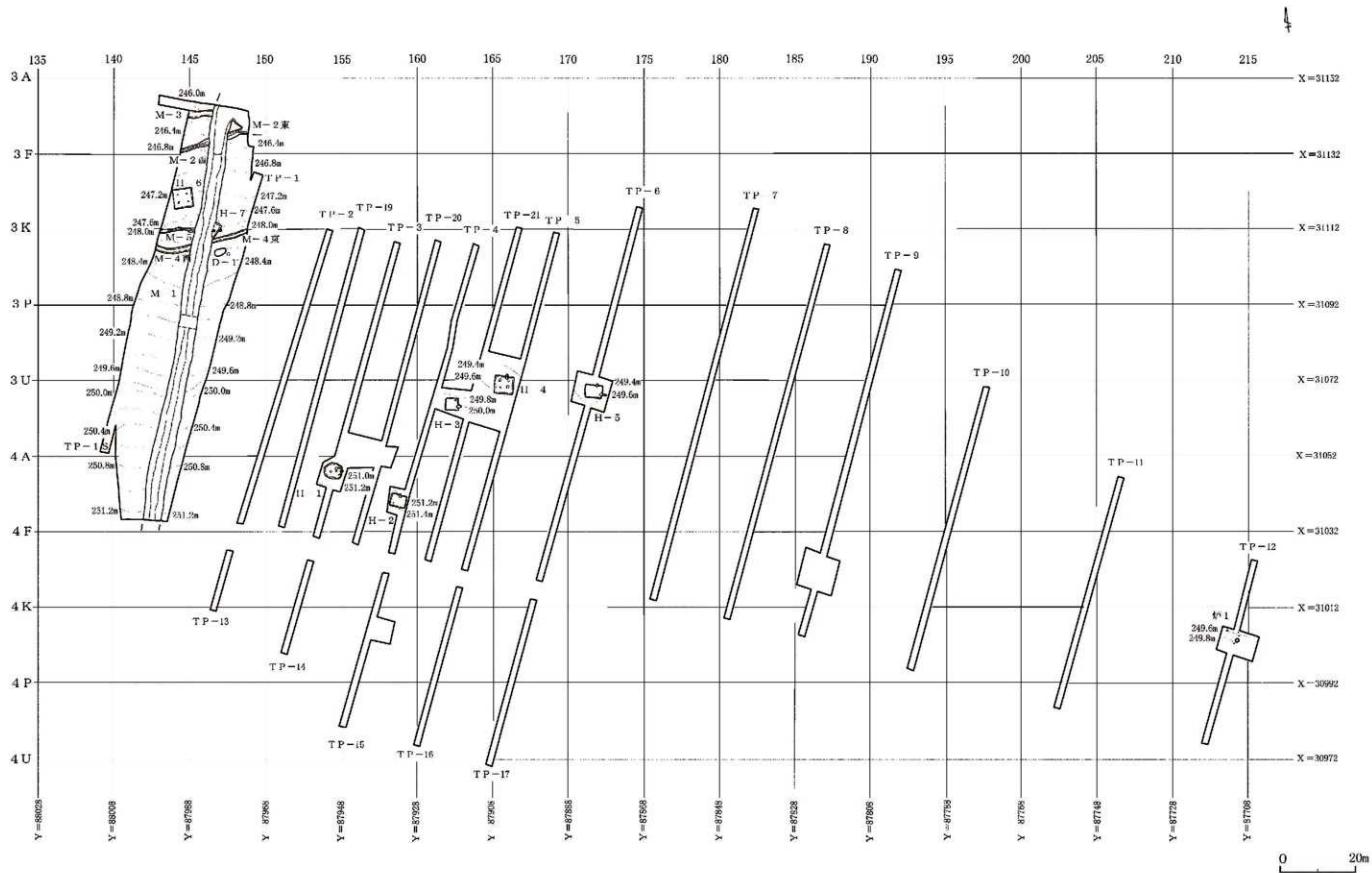
3 層序

向原Ⅲ遺跡の土層堆積は、I a層の耕作土、II・III・IV層の黒色土とV層以下のローム層に分けられる。黒色土中には浅間A軽石(As-A: 1783年)と浅間B軽石(As-B: 1108年)が含まれ、一部では純層も認められる。縄文時代の遺物はIV層中、古墳から古代にかけての遺構はⅢ層下部から検出される。本遺跡の堆積状況をみると、北傾斜のため土層の堆積が薄い要因もあるが、ほぼ全域でⅢ層まで人為的な削平及び耕作による擾乱が及んでいたため、II層、III層が安定して堆積したところは少なかった。また、住居址はトレンチャーによる細い耕作溝のため遺存状態は良好ではなかった。

(井上)



第5図 土層断面模式図・土層説明



第6図 向原三遺跡全体図

IV 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

向原遺跡では過去の2回の調査によって、縄文時代前期前半の集落址及び古代（律令期）の集落址が確認された。また、周辺には古代の牧園連遺構群が存在することが調査によって明らかにされている。

向原Ⅲ遺跡における主な遺構は、縄文時代の炉址、古墳時代中期～後期の住居址2軒、奈良時代の住居址5軒、土坑1基、大溝1条、溝4条である。

A区

A区はトレンチ調査を実施した部分である。ここでは、調査区西で古代の竪穴住居址が5軒検出された。東側では、縄文時代の遺物包含層を確認したが、包蔵量は少なく、遺構も炉址を確認したのみで遺構の密度が薄い場所であることが判明した。トレンチからは縄文時代前期及び中期の土器、石器等が出土した。

B区

B区は調査区西端で、大溝が確認された部分である。ここでは、古代牧園連遺構である大溝が、調査区の南北を横断して検出された。また、大溝と切り合い関係をもつ小規模な溝が4条検出された。大溝に壊された古墳時代中期の竪穴住居址1軒と土坑も検出された。小規模な溝4条は、大溝より時期が新しい。

C区

C区とした場所は、調査区南側の突出した部分で、富岡市との市境に位置する。この部分では下高田衣沢1号墳として、以前より古墳の存在が指摘されており、墳丘と思われる高まり（盛土）と露出した石室跡が確認できる。今回の調査では、この古墳の周堀に当たると予想されたため、確認調査を実施したが、表土（黒色土）は薄く、ローム層（V層下部からVI層付近）まで削平されており、古墳に関係する遺構は確認できなかった。

(井上)

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構 (第14図)

縄文時代の遺構は、12トレンチでIV層中部から炉址（地床炉）が確認された。炉址に直接関連する遺物の出土はなかったが、周辺から中期の土器、石器が少数出土したが、遺構の時期は不明である。

なお、向原遺跡及び向原II遺跡では、前期中葉（有尾・黒浜式期）～後葉（諸磯b式期）の遺構・遺物が確認されている。

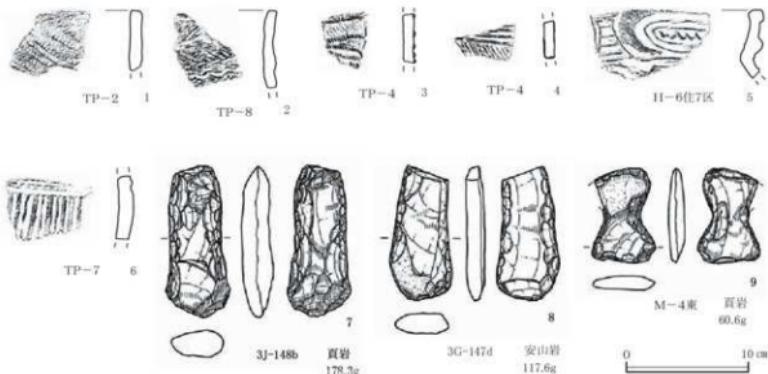
(2) 遺物 (第7図)

縄文時代の遺物は、全て遺構外で、包含層から土器や石器が少数出土した。主な遺物は、前期中葉の有尾・黒浜式（1）、諸磯b式、十三菩提式～五領ヶ台式（2～4）、中期初頭（5）、中期後半の加曾利E式（6）の土器片と打製石斧（7～9）、凹石等の石器である。

1は口縁部破片で胎土に纖維を含む。地文は縄文である。2は結節縄文が施された前期末から中期初頭の土器片である。3は結節浮文線が施された土器片で十三菩提式である。4は斜沈線と平行沈線が施された五領ヶ台1式である。5は浮線で施文された口縁部である。6は表面に赤彩が施された加曾利E式である。

石器は打製石斧のみを図示した。打製石斧は、側縁が直線状で両刃となるⅡ形態（6・7）、中央に抉りをもつ上下が刃部となるⅢ形態（8）である。石材は頁岩と安山岩である。8は後期の形態である。

(井上)



第7図 縄文時代 土器・石器実測図

3 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構

H-6号住居址（第13図・第14図）

H-7号住居址（第14図）

平面正方形、柱穴は4カ所で、南東隅に貯蔵穴がある。炉址は検出されなかった。床面には炭化材が残ることから焼失住居と思われる。覆土は火災による屋根材の崩落土である。床面は硬くしまっているが貼床は確認できなかった。遺物は土師器の破片が出土したが、完形個体の出土は無かった。特殊遺物では緑色岩類製の棒状礫が、3区2層で出土した。

H-7号住居址（第14図）

M-1・5号溝により住居址の1/3が破壊されている。現況から判断して正方形であると推測される。本住居址も焼失住居である。床の南東隅には貯蔵穴、周溝が確認されたが、調査部分では炉址は検出されなかった。柱穴も不明である。貯蔵穴の脇には、白色粘土が出土した。残存している部分の覆土中からは、大量の土師器が出土した。完形個体も多く、台付甕は、北東壁際で横倒しの状態で出土した。

（井上）

(2) 遺物

土器

H-6号住居址出土の土器（第23図1）

1は土師器の甕で、4世紀中頃である。

H-7号住居址出土の土器（第23図2～7）

2は甕、3と4は高甕、5～7は甕で、5世紀中頃の土器群である。加賀塚遺跡のII期に相当する。6の台付甕の胴上半に吹きこぼれ痕があり、口縁部と胴下半部に煤が付着していることから、炉での使用が考えられる。

砥石（第24図3）

H-7号住居址から流紋岩製の砥石が2点出土した。3は扁平礫に1カ所、両面からの孔が穿たれている。被熱痕が残り、やや脆い。6は礫面に敲打痕（凹）が残る。滑らかな磨面が認められる。

棒状礫（第24図10）

H-6号住居址から緑色岩類製の棒状礫が1点出土した。細長い自然礫で一部研磨が認められる。

（土器：三浦・井上 その他遺物：井上）

4 奈良時代以降の遺構と遺物

(1) 遺構

住居址（第8図～第12図）

H-1号住居址（第8図）

平面やや五角形気味の不整円形である。竈は東壁に存在する。柱穴は深さ及びその配置により3本（P-1・3・4）と推定される。竈は搅乱により遺存状態が悪いが、ロームを含む土で造られた簡易的な構造である。また、竈右脇には、壇上の高まり（地山削りだし）が認められ、この部分では多数の遺物（环の完形個体4点を含む）が出土した。H-5号住居址と同様、出土土器には時期差が認められる。完形の环は全て同時期であるが、それ以外の土器（主に甕）は「廃棄」による混在の可能性が考えられる。住居覆土は人為的な埋め戻しによるものである。一般的な住居址の平面形態とは異なり、3本柱である点で注目される。

H-2号住居址（第9図）

平面長方形、柱穴はなく竈左側に貯蔵穴が存在する。竈は北壁に設置されていた。焼土を多く検出したが、簡易的な構造である。住居址南西隅には大形安山岩の台石が置かれていた。遺物は上層から下層にかけて、須恵器を中心に出土した。編物石は2点出土した（安山岩）。完形個体はない。覆土は人為的及び自然堆積によるものである。

H-3号住居址（第10図）

平面正方形であるが、柱穴は無い。竈は搅乱により破壊されていたが、簡易的な構造である。竈右脇には貯蔵穴が存在する。遺物は1層からはほとんど出土せず、2層と3層で南側と竈左脇付近の2カ所で出土した。完形個体はない。羽口が竈左脇から出土した。

H-4号住居址（第11図）

平面正方形、柱穴は4カ所、周溝が存在し、北壁には竈がある。この時期の典型的な形態である。覆土は人為的な埋め戻しの後、自然堆積である。遺物は須恵器を中心に破片が多数出土したが、完形個体は少ない。特に竈右脇付近で多数の遺物が出土した。編物石は床中央を中心にして12点出土した。

H-5号住居址（第12図）

平面長方形、柱穴はなく、竈は北壁及び東壁の2カ所に存在する。竈は造り直しされており、東竈（竈1）が新しい。床面には大小の炭化材が多数分布することから、焼失住居と思われる。竈右脇の土坑が貯蔵穴と考えられ、須恵器の环が1点出土した。遺物は住居址東半分において3層（床面）で完形土器を含め多数出土した。また、H-5号住居址と同様、出土土器には型式学的に時期差が認められる。「廃棄」による混在の可能性もあるが、共伴している可能性も否定できない。竈前では編物石が、10点まとめて出土した。床面から用途が不明な凝灰岩（白色）の大形礫も出土した。住居覆土は火災により屋根が

崩落した後、自然堆積が認められた。

土坑

D-1号土坑（第14図）

M-1号西、M-4号溝の南で確認された。確認面より深く土師器片が刺さっている状態、遺構が円形に浅く窪むことから土坑として認識した。底面は掘削により凸凹である。遺物は土師器痕片が少数出土した。

溝

M-1号溝（第16図～第18図）

本遺構は中野谷地区に広く存在する牧関連遺構の一つである区画溝である。調査区の南北を縱断するように、浅間B軽石層が2列の筋状に観察されたことにより、区画溝と断定し、約110mに涉って検出した。溝の規模は上幅3m、下幅1mである。断面は中世城郭の堀の一つの形態である。薬研堀に近く法の途中から垂直に下がる。底面は掘削により「あばた状（凸凹）」のままである。なお、底面及び法面には、多数の深いピットが検出された。北側部分は湧水により、底部が冠水している。覆土は人為的な埋め戻しが、溝中位まで行われた後、自然堆積により埋没している。浅間B軽石層下までは、浅く窪んだ状態であったと思われる。埋め戻しの覆土にはローム及びYPが大量に混入していることから、溝の両側には、掘削土が盛られていた可能性が高い。しかし、表土が薄く、削平されていたため確認は得られなかった。この溝は、南側の谷へと延びているものと推定される。当初、西側に隣接する真光寺原遺跡にある東西に延びる溝が、向原Ⅲ遺跡の溝と合流すると想定されたが、真光寺原遺跡の溝が、調査区外の露頭（県道予定地内）で確認したところ、東へは延びずに南側に曲がって、谷へと抜けていくことが確認された。M-1号溝の北側は、東へ折れ曲がる可能性がある。

この溝の北方向には、低地部分では湧水があるため、溝の掘削範囲を推定することはできないが、上宿南遺跡で確認された溝と合流する可能性が高い。

溝の両側で、関連遺構の検出に努めたが、遺構は検出されなかった。また、ピットについても溝と同時期のものは確認されなかった。

遺物は覆土中から出土したが、時期が特定できない土師器・須恵器の小破片が僅かに出土したのみである。また、溝中央部の底では、炭化材を検出したが、性格は不明である。

M-2・3・4・5号溝（第19図・第20図）

4条の溝は、M-1号溝を横切って検出された。覆土は浅間B軽石を混入する土（二次堆積）である。切り合い関係により、全てM-1号溝より新しいことが判明している。溝の底面は掘削により凸凹で整地されていない。等高線に沿って斜めに延びていることから、何らかの「区画溝」の可能性が考えられる。東西方向に延びる溝は、向原Ⅱ遺跡（土地改良地点）でも検出されている。

（井上）

(2) 遺物

土器 (第21図～第22図)

H-1号住居址出土の土器 (第21図1～11)

1～4の壺は8世紀後半である。5と6の土師器暗文土器と7～11の甕は8世紀前半にみられるタイプであり、時期の異なる土器が共存している点で注意が必要である。

H-2号住居址出土の土器 (第21図12・13、第22図1)

12は土師器壺、13は台付甕台部、1は鉢で、8世紀前半である。

H-3号住居址出土の土器 (第22図2・3)

2は土師器暗文土器、3は甕で、8世紀後半である。

H-4号住居址出土の土器 (第22図4～9)

4～6は土師器壺、7は暗文土器、8は小形壺、9・10は甕で8世紀前半である。

H-5号住居址出土の土器 (第22図10～16)

11と12の土師器壺と13の暗文土器は、8世紀後半の典型的なタイプで、10の壺はそれよりやや古手と考えられる。14の蓋と15の高台付壺は8世紀前半に多いタイプである。16の磨きの入った土師器壺は、古墳時代（6世紀代）のタイプで、他の土器とは時期が合わない。

鉄製品 (第24図1)

1は刀子の基部付近の破片である。鋒に覆われ、遺存状態は悪い。断面「△」で空洞である。

紡錘車 (第24図2)

2は、滑石製で、別々から出土した2点が接合した。削り整形後、研磨が施されている。

砥石 (第24図4・5)

7点出土した（遺構外は2点）。4は流紋岩製の仕上砥である。角柱状の礫を素材とし、4側面に研ぎ面が認められ、使用により彎曲している。5は角柱状の礫を素材とし、全面に研ぎ面が認められる。

軽石 (第24図7・8)

2点とも軽石製の円礫で、中心に凹がある。用途は不明である。

原石・搬入礫 (第24図9～11)

9は石英の原石（搬入礫）である。10は礫面に削り痕が残るが用途不明で、搬入礫とした。11には浅い削痕が残る。

土製品 (第24図13・14)

13は貫通する孔と円形の凹がある用途不明の土製品である。表面は滑らかに磨かれている。14は土師質土器の壺底部を再利用した土製円盤である。回転糸切り痕が残る。

羽口 (第24図15・16)

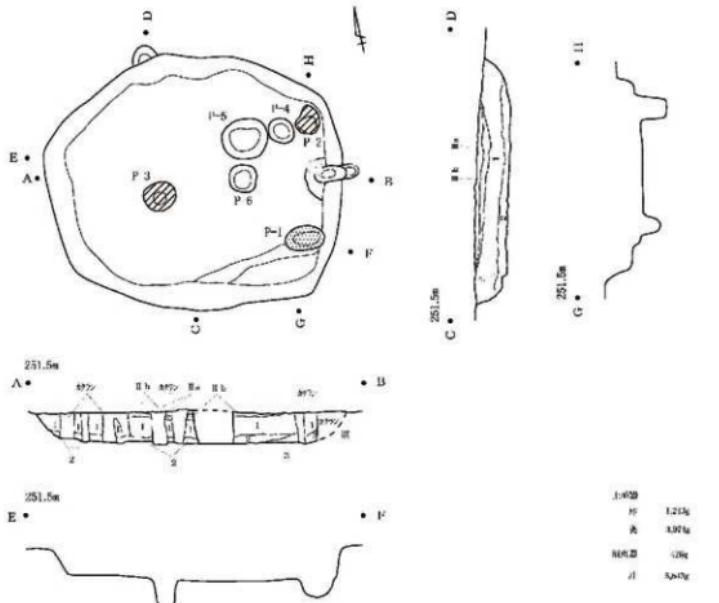
2点とも円筒状であり、先端に黒色付着物がある。

縞物石

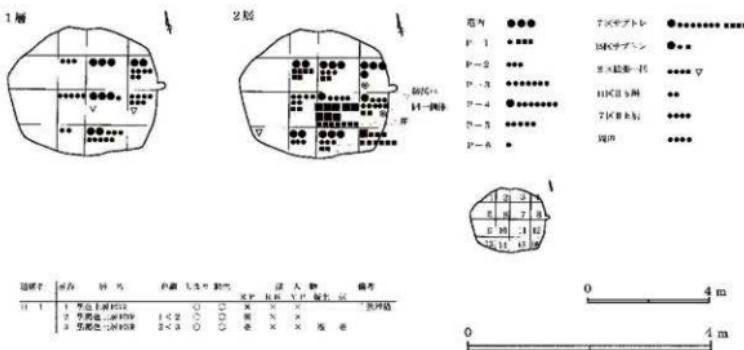
大きさの平均（完形品）は、H-4号住で長11.5cm、幅5.2cm、厚3.5cm、重264.6g、H-5号住で長12.7cm、幅5.6cm、厚4.2cm、重389.2gである。

（土器：三浦・井上 その他遺物：井上）

H-1 分位

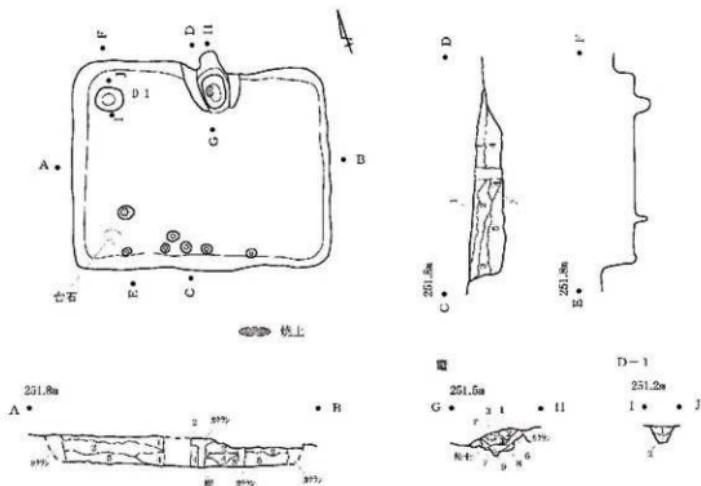


上器分布



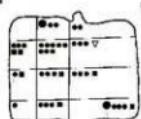
第8図 H-1号住居址実測図

H-2号住



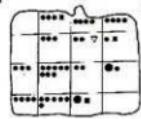
土器分布

1番



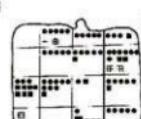
遺物名	地名	片	円盤	筒瓦	丸瓦	切妻瓦	入母子	Y型	N型	井
H-2	1 H-2-1 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	2 H-2-2 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	3 H-2-3 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	4 H-2-4 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	5 H-2-5 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	6 H-2-6 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	7 H-2-7 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	8 H-2-8 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	9 H-2-9 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	10 H-2-10 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○
	11 H-2-11 K-10m	△	○	○	○	△	×	○	×	○

2番



140m	外	50m
140m	内	50m
312m	外	50m
312m	内	50m

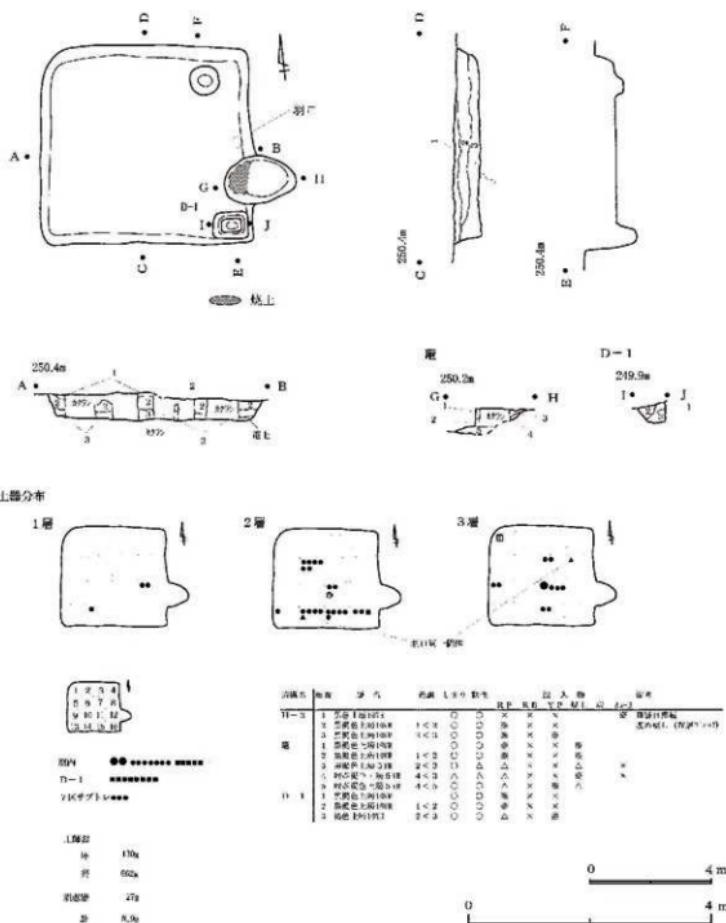
3番



140m	外	50m
140m	内	50m
312m	外	50m
312m	内	50m

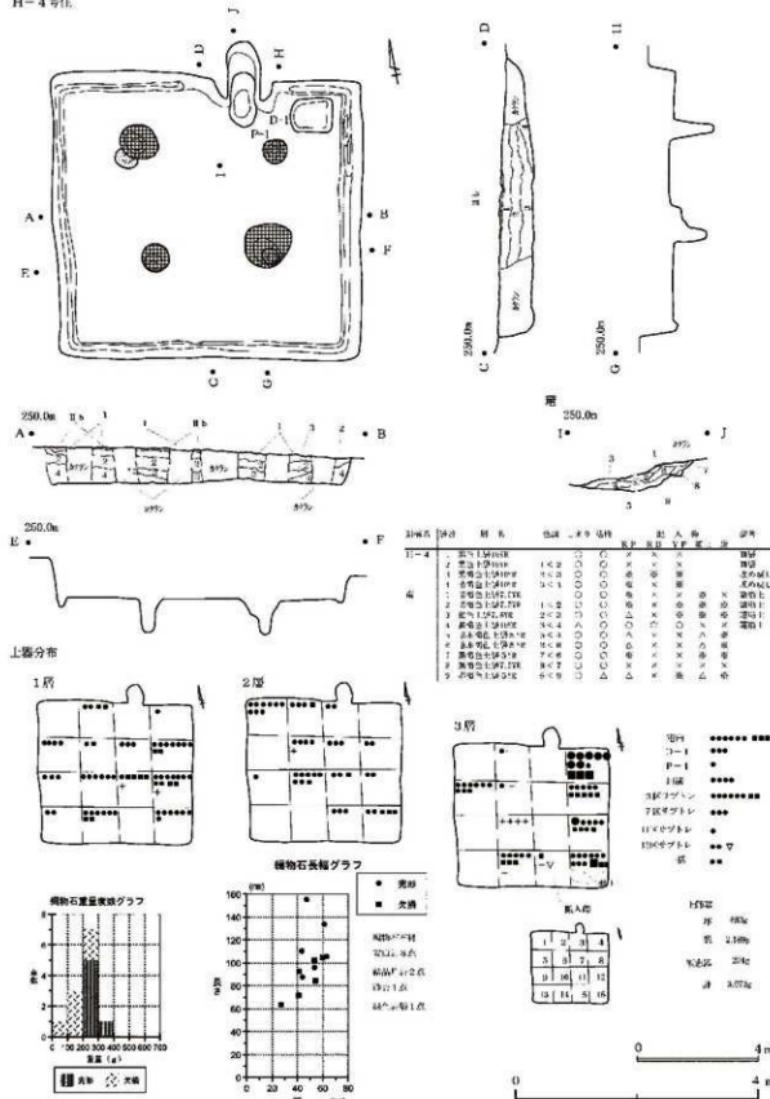
第9図 H-2号住居址実測図

H-3号住

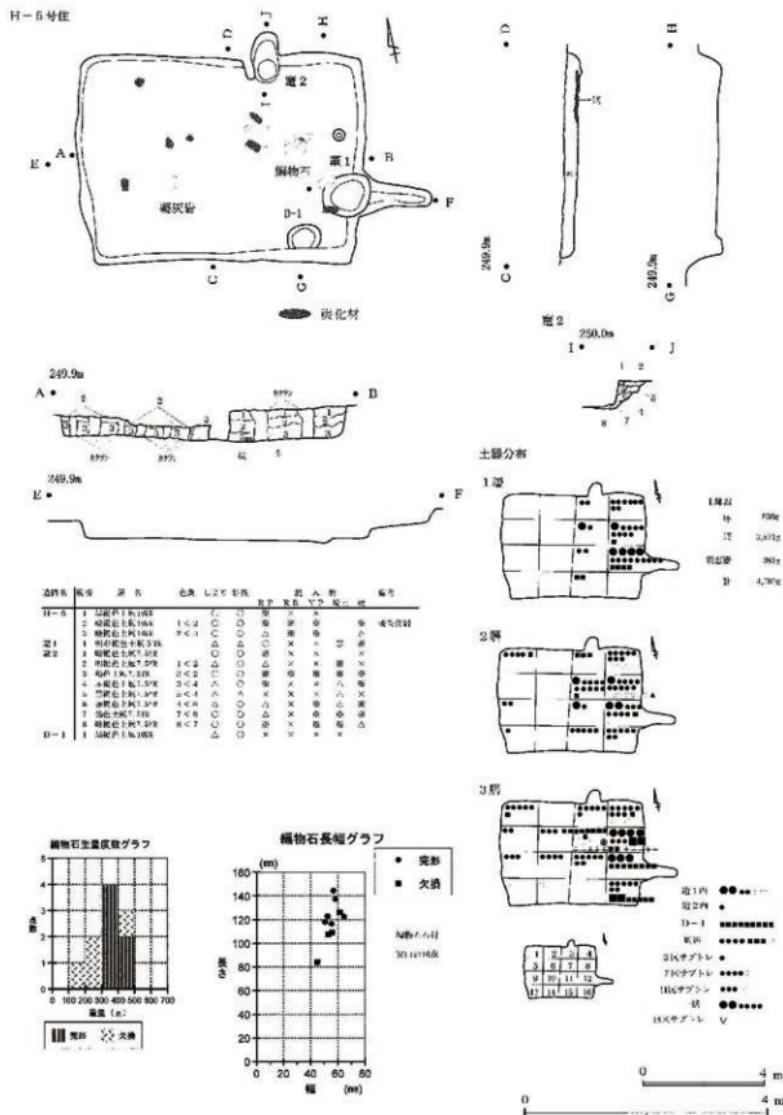


第10図 H-3号住居址実測図

H-4号住

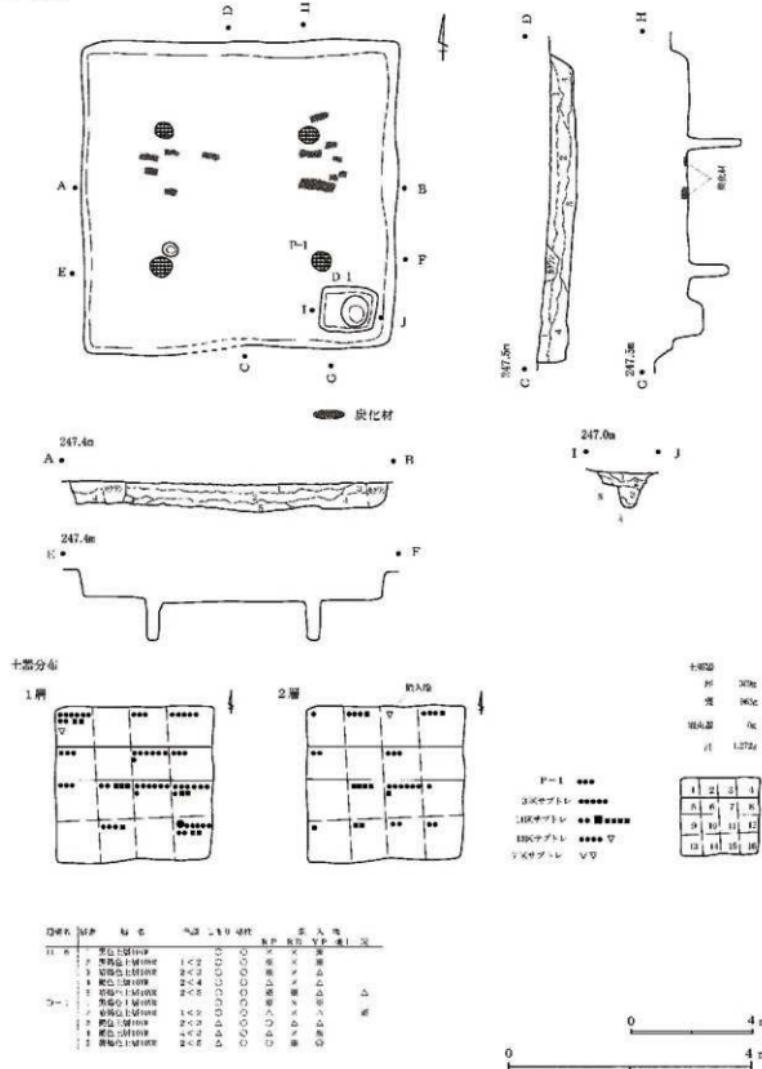


第11図 H-4号住居址実測図



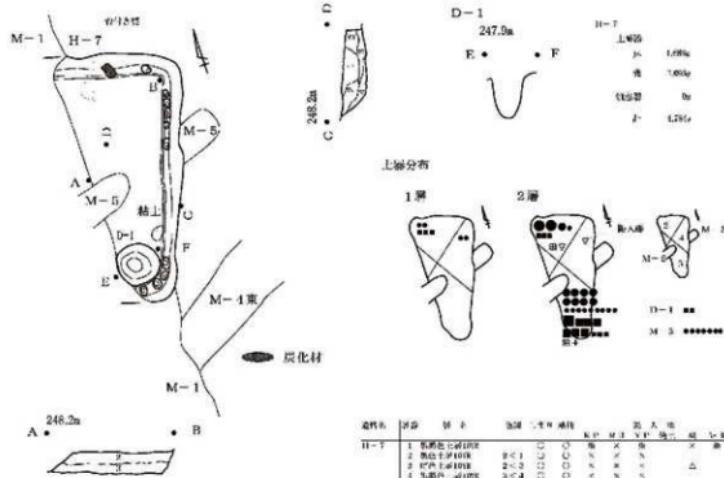
第12図 H-5号住居址実測図

H-6号住



第13図 H-6号住居址実測図

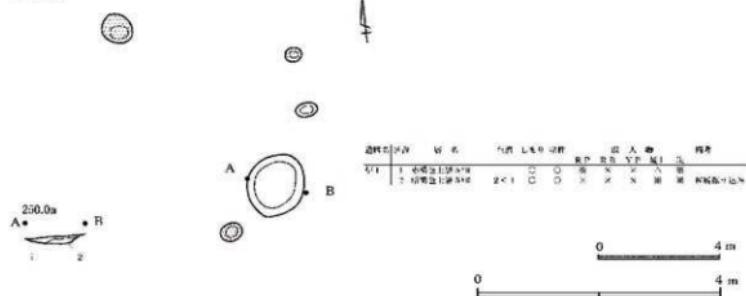
H-7号住



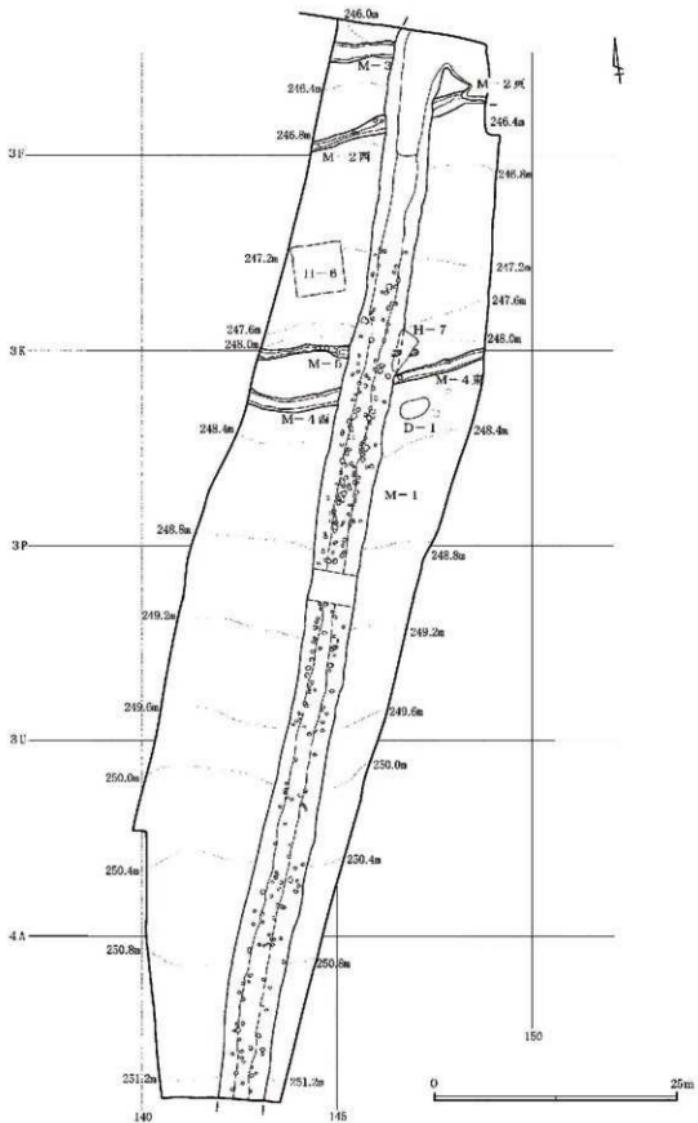
D-1



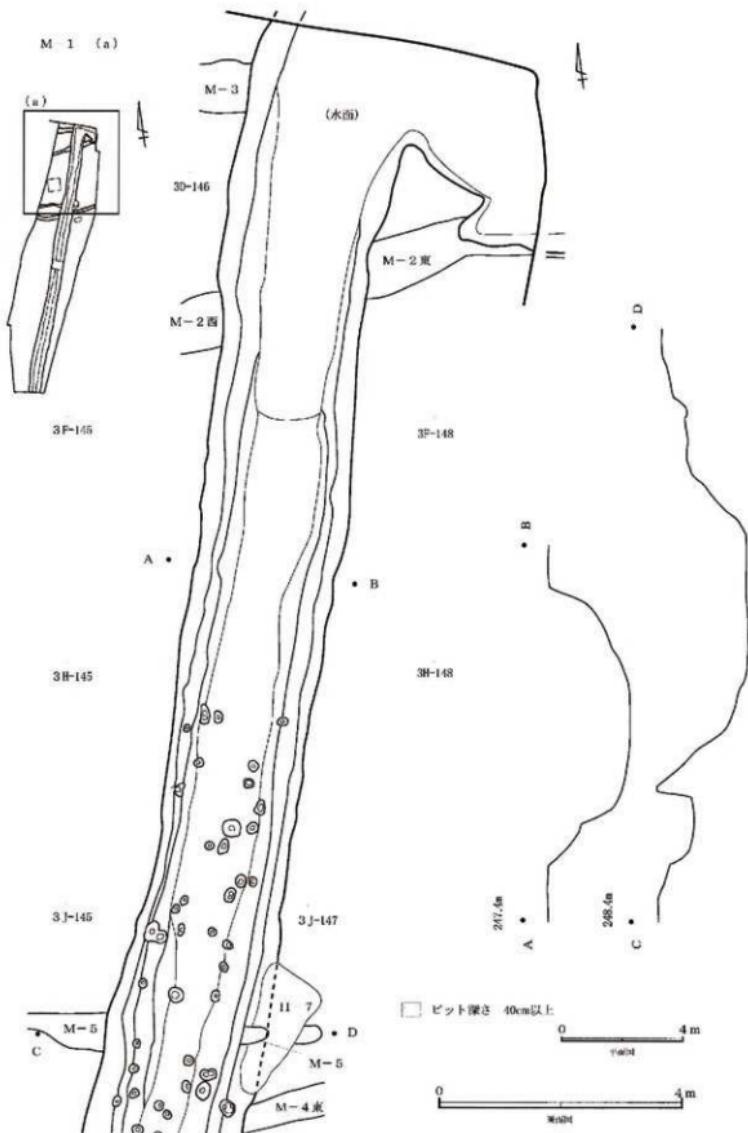
炉-1(簡文)



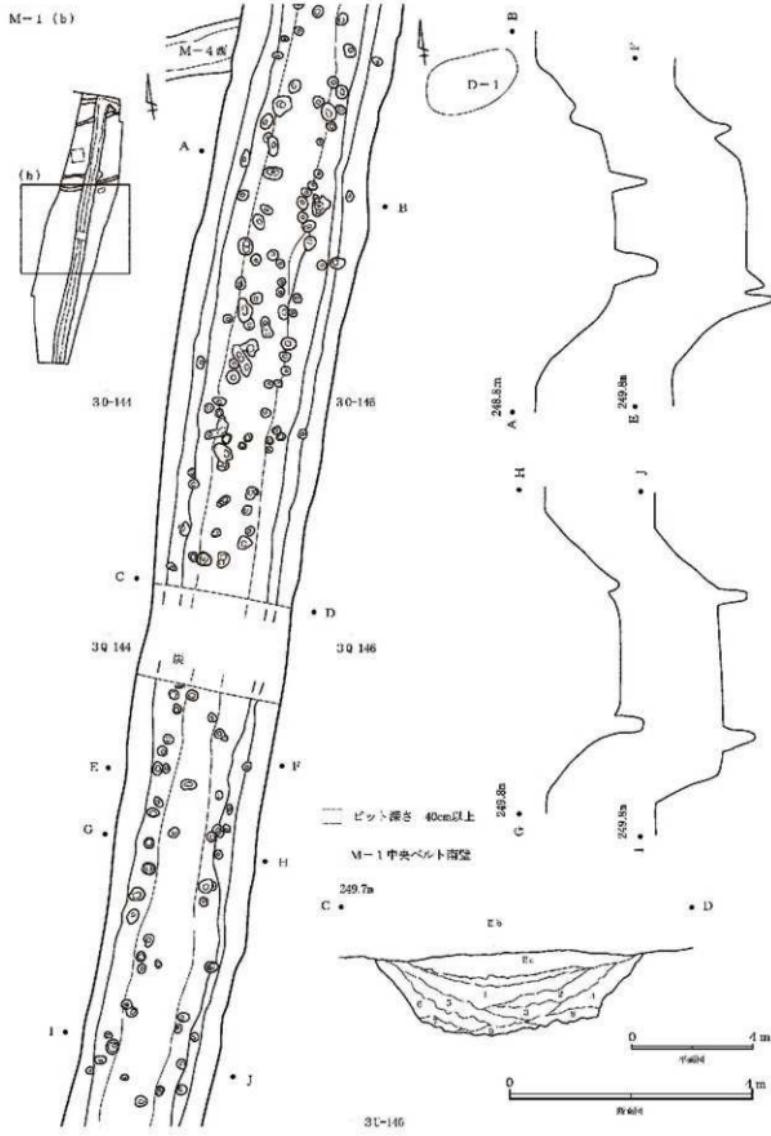
第14図 H-7号住居址・D-1号土坑・炉実測図



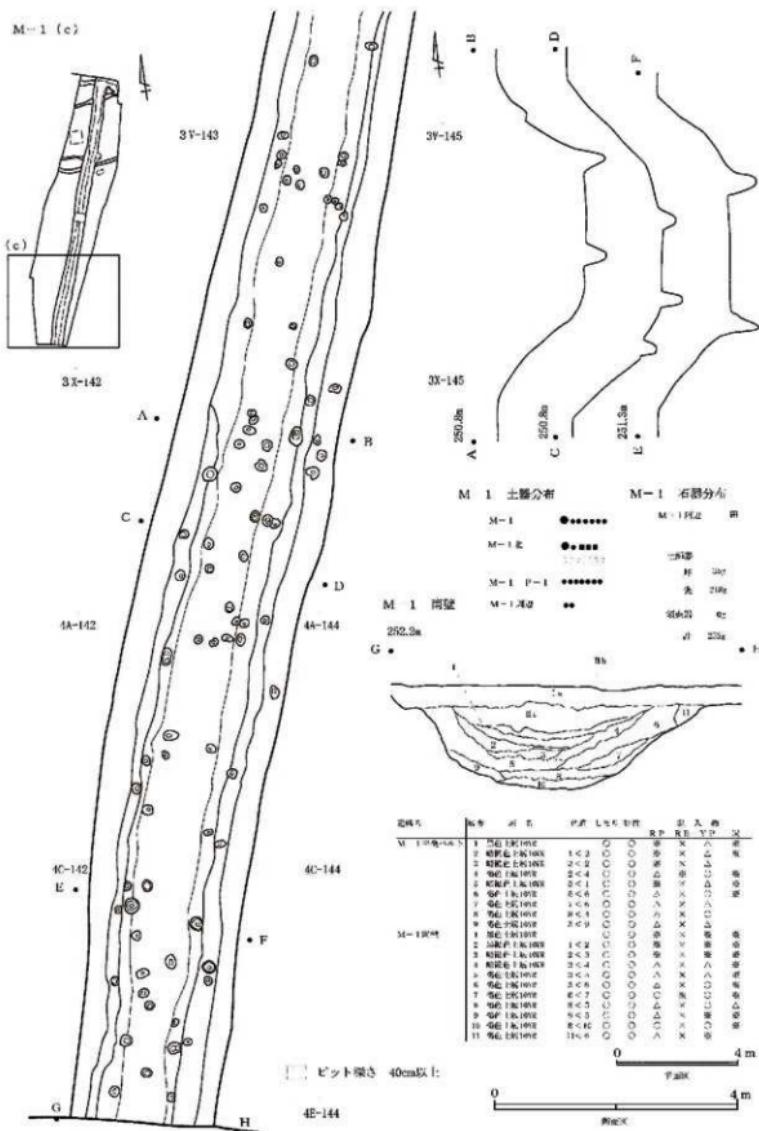
第15図 M-1～5号溝位置図



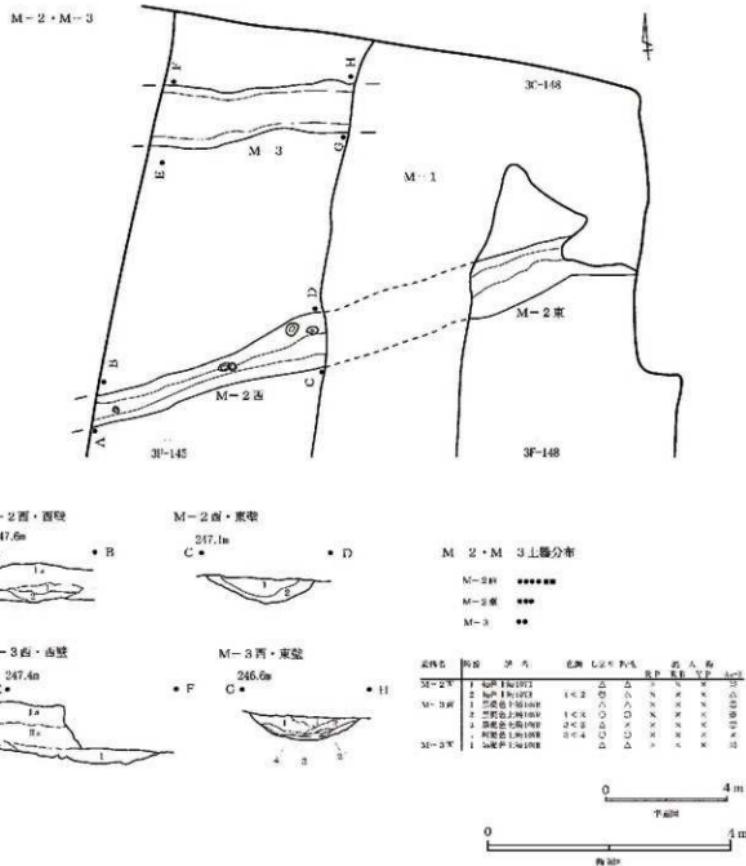
第16図 M-1号溝実測図(1)



第17図 M-1号溝実測図(2)

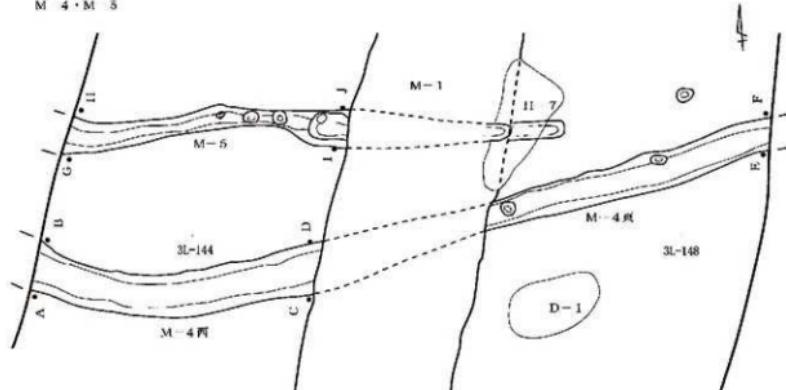


第18図 M-1号溝実測図(3)



第19図 M-2号・M-3号溝実測図

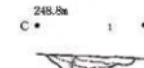
M-4・M-5



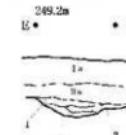
M-4 西・西壁



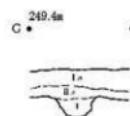
M-4 西・東壁



M-4 东・東壁



M-5 西・西壁



M-5 西・東壁



M-4・M-5 上部分布

M-4 西 ······
M-4 东 ······
M-5 西 ·······

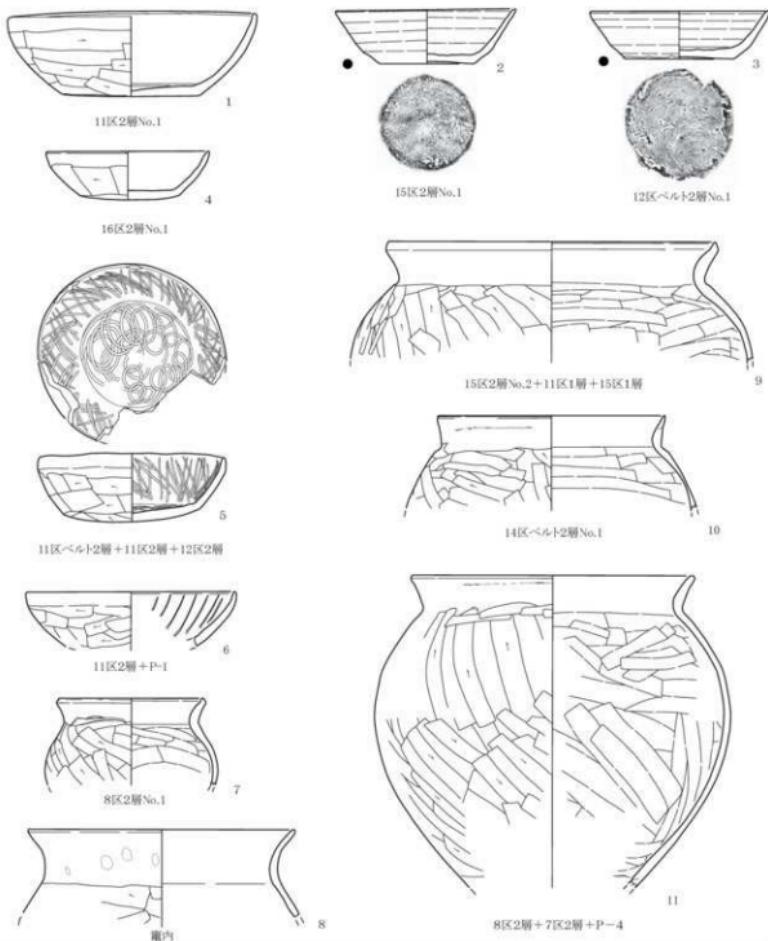
層番号	西壁	東壁	層厚	層序	岩相	地質	層序	岩相	地質
M-4 西									
1	泥炭岩 1m 198R			1 < 2	□	□	1 < 2	□	□
2	泥炭岩 1m 198R			3 < 4	○	○	3 < 4	○	○
3	泥炭岩 1m 198M			5 < 6	○	○	5 < 6	○	○
4	泥炭岩 1m 198M			7 < 8	△	△	7 < 8	△	△
M-5 西									
2	泥炭岩 1m 197Z			1 < 2	△	△	1 < 2	△	△

0 4 m
Vertical

0 4 m
Horizontal

第20図 M-4号・M-5号溝実測図

H-1号住

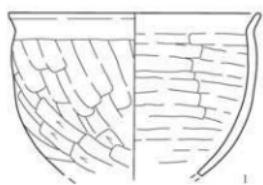


H-2号住



第21図 H-1号・H-2号住居址出土土器実測図

H-2号住

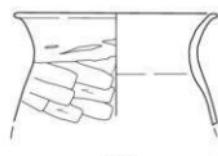


15区2層+3層+サブトレ1層

H-3号住



D-1+竈内



竈内

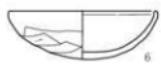
H-4号住



16区3層No.1



16区3層No.2



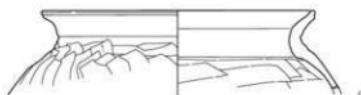
4区3層



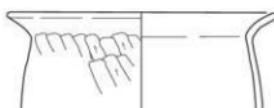
4区3層No.1



12区3層



4区3層



1区2層+5区3層

H-5号住



8区3層No.1



D-1



8区3層No.2



12区3層



4区2層+4区3層+8区2層+竈内



7区3層No.1



16区3層No.1



第22図 H-2号・H-3号・H-4号・H-5号住居址出土土器実測図

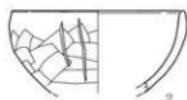
H-6号住



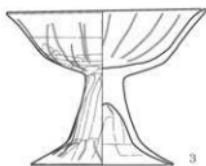
1

11区サブトレ2層+10区1層+16区1層+1区1層
+10区ベルト2層+10区2層+14区2層

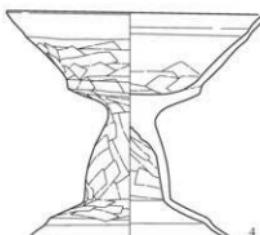
H-7号住



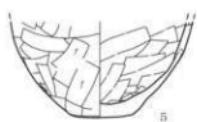
3区2層No.1



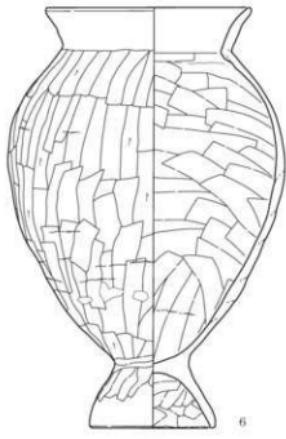
3区2層No.2



3区2層No.5

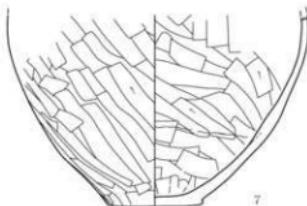


3区2層No.3



6

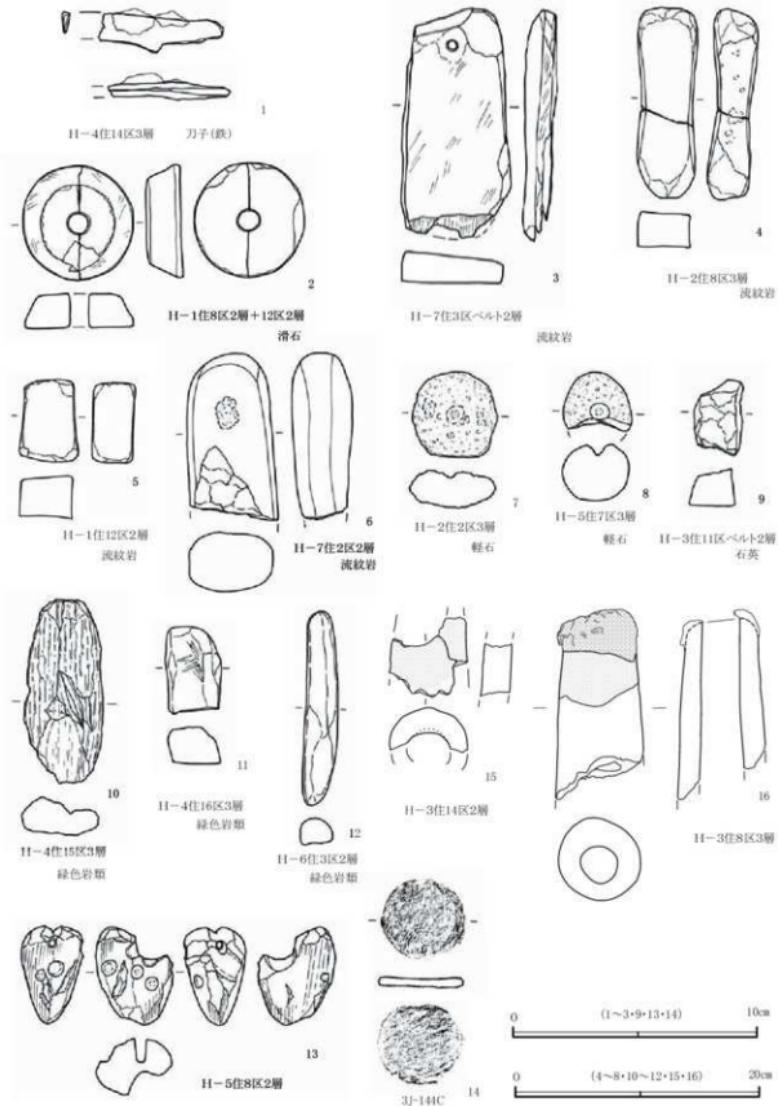
2区2層No.1



3区2層No.4



第23図 H-6号・H-7号住居址出土器実測図



第24図 古墳・奈良時代 鉄製品・石器・石製品・土製品実測図

V 成果と問題点

1 奈良時代の土器について

安中市で調査された古墳時代末から奈良時代の集落遺跡は約30遺跡を数える。この時期の土器様相は大枠では県下全域と同様であるが、いくつかの点で地域的な特徴を示すものがある。それらを視点にし、地形的に分けられる各遺跡群の様相を検討したい。

まず、特徴となるのは土師器甕であり、一般的な甕は9世紀に口縁部の形態が「コの字」状となるいわゆる武藏型（甕A）と呼ばれる甕であるが、西毛、特に富岡地区を中心として別系統の土師器甕（甕B）が見られる。この甕Bは、古墳時代の胴部を縦位に笠削りする甕の系譜にあると考えられ、口縁部は大きく外反し、胴部上位の膨らみが少なく、底径が甕Aに比べると大きいものであり、器厚が厚い。時期的には8世紀代に見られるもので、胴部が長胴なものから短くなつて行く変遷が想定できる。

また、胴部が大きく丸みを持つタイプの甕についても、県央部や東毛に主に分布する甕（甕C）とは異なるものである。甕Cは甕Aに共通する調整で作られ、胴部の上位を斜めに、中位から下位を斜縦位に笠削りし、比較的薄手に作られた甕である。それに対して、安中市で出土する甕（甕D）の大半は口縁部がやや短く、調整は縦位の笠削り、厚手で重い印象の甕となっている。その他、土師器壺については、暗文土器のタイプが多い点が指摘されている。

これらの点を遺跡群の中で比較するに際しては、報告書の中に掲載された土器の点数を基準にし、甕に関しては8世紀代での甕Aの占める率を、暗文土器壺は土師器壺との比較で暗文土器壺の占める率を示した。この出土率に関しては、出土遺物すべてを対象としてカウントすべき遺物の基準を検討したわけではないので、曖昧にならざるを得ず印象的な意味が強い。しかし、ある程度は量の違いを表しているものと考えられる。

まず、碓氷川の北側、秋間丘陵で調査された集落遺跡は北原II遺跡のみであり、8世紀前半が3軒、8世紀後半が5軒検出されている。資料が少なく須恵器が突出して存在するのかは不明だが、土師器甕に関しては甕Aが83%と主体を占め、暗文土器は12%と少ない。

同じく碓氷川の北側で九十九川から碓氷川の間の地域では、嶺・下原遺跡、嶺・下原II遺跡、榎木畑遺跡、清水I～III・V・VI遺跡が検出されている。7世紀後半の竪穴住居が11軒、8世紀前半が17軒、後半が13軒検出されている。これらの遺跡での土師器甕Aの割合は50%、暗文土器は30%である。九十九川と碓氷川に挟まれた中位段丘上に位置する地尻遺跡では7世紀末から8世紀前半の竪穴住居2軒が検出され、資料は少量ながら土師器甕はBが見られる。植松・地尻遺跡は7世紀末から8世紀代に古代「碓氷郡」の郡家あるいは駅家などに關係する施設の可能性が考えられており、竪穴住居としては7世紀後半のものが2軒検出されている。8世紀代の土器も含めて須恵器の卓越した状況が窺える。甕については8世紀代のものが出土していないため不明である。

松井田丘陵の南縁に位置する五料平遺跡、五料野ヶ久保遺跡、五料稻荷谷戸遺跡では、8世紀前半が4軒、後半が6軒検出されている。土師器甕Aは67%、暗文土器壺は70%である。松井田丘陵の北面に樹枝状に張り出す台地上に位置する高梨子三次郎遺跡では、8世紀前半が2軒、後半4軒が検出されている。資料は少ないが土師器甕Aが33%、土師器壺は暗文土器のみであり、須恵器蓋壺が多い傾向が見られる。松井田丘陵の碓氷川に面した東南斜面に位置する愛宕山遺跡では7世紀後半の竪穴住居が1軒、8世紀前半が2軒、後

半が1軒検出された。土師器壺Aが8%、暗文土器壺は22%である。

碓氷川右岸の下位段丘上では、柳瀬川に平行して、東から西裏遺跡、西裏・西新井遺跡、松井田工業団地遺跡、人見大王寺遺跡、人見中の條遺跡、人見中の條2遺跡（以上大王寺地区遺跡群）がある。

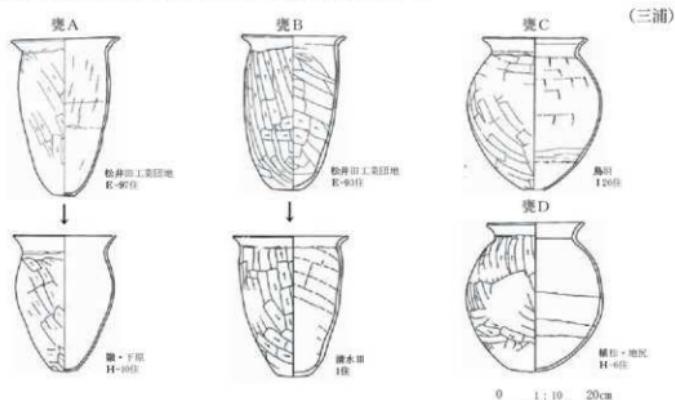
これらの遺跡で合わせて7世紀後半の竪穴住居が25軒、8世紀前半が45軒、後半が38軒検出されている。この地域では土師器壺Aは少なく20~30%、特に西裏遺跡、西裏・西新井遺跡では壺Aがほとんどない。暗文土器壺は10~35%であるが、人見中の條2遺跡では暗文土器が82%を占めている。この人見中の條2遺跡では8世紀前半の7号住から須恵器円面鏡が出土し、隣接する人見中の條遺跡では9世紀代の円面鏡や風字鏡が出土しており、この地域の中心的な機能を持った遺跡の可能性が考えられる。また、安中市内ではほとんど壺Cは見られないが、人見中の條2遺跡、松井田工業団地遺跡で少量出土している。

碓氷川上位段丘の横野台地の中野谷地区遺跡群では、竪穴住居が少なく資料もあまりないが、向原Ⅲ遺跡では8世紀前半の竪穴住居が4軒、後半が1軒検出されている。壺はDタイプが主となっているが、壺Aは2点、Bは1点出土している。暗文土器壺は40%である。また、平塚遺跡は終末期の古墳であるが、8世紀前半代の土器が出土しており、ここに見られる土師器壺はBタイプである。

鷲宮地区遺跡群では荒神平・吹上遺跡、上ノ久保遺跡があり、7世紀後半が7軒、8世紀前半が6軒、後半が2軒、土師器壺Aは36%、暗文土器壺は30%である。

安中市の南東部、碓氷川の右岸の丘陵上にある野殿地区遺跡群では、西殿遺跡、堀谷戸遺跡がある。7世紀後半から8世紀前半にかけての住居が6軒検出されている。資料は少ないが、土師器壺は壺Aが多く、また暗文土器は出土していない。

さて、土師器壺A・Bの出土傾向を主として見てきたが、秋間丘陵地区や野殿地区のように壺Aが大半を占める地域がある一方、中野谷地区のように少ない地域も見られる。例えば、北原Ⅱ遺跡などは、周辺は窯業地帯でありその製品は周辺地域のみではなく広範に流通しており、北東側の高崎市域との比較も考慮する必要がある。また、中野谷地区は地理的に近い富岡方面との繋がりが考えられ、富岡地区に分布の中心があると思われる壺Bの存在が顕著となっていることが指摘できる。以上のように壺Bは地域色を示す存在となるが、資料的な制約があり量比の問題はさらなる検討が必要と思われる。



第25図 土師器壺分類図

2 牧関連遺構群について

向原Ⅲ遺跡の調査によって、中野谷地区における牧の区画溝及び関連遺構群の全容がほぼ明らかとなつた。これらの遺構群については、大工原 豊氏等によって、その性格と歴史的位置づけが行われている（大工原1994・2001）。ここでは、すでに報告された遺構群を含めその概要と牧についてまとめることにする。

1. 区画溝を検出した遺跡

区画溝1 猫沢川右岸で南北方向に伸びる溝である。土橋を確認。現在のところ牧の東縁部と推定されるに相当する（注連引原Ⅱ遺跡）。

区画溝2 南北方向に伸びる溝で低地間を区画する（下塙田遺跡）。

区画溝3 方形区画と推定され、沼地とつながっている。土橋が存在する。面積8.9ha（中原遺跡）。

区画溝4 方形区画と推定され、区画5とつながることから、時期差が認められる。低地の縁に溝が伸びる。東には狩り込み用施設がある（下宿東遺跡・細田遺跡・和久田遺跡・上宿南遺跡・砂押遺跡）。

区画溝5 台地の南北を区画する溝と台地縁に伸びる溝である。区画溝5とした北側には、自然地形（低地）を利用した三角形の区画が存在する（上北原遺跡・原遺跡・向山遺跡・天神原遺跡）。南北に伸びる溝は、区画溝4と共有している。当地域では最も広域に区画する溝で、さらに西侧にも広がっているものと推定される（西向原遺跡・真光寺原遺跡・向原Ⅲ遺跡・上宿南遺跡・砂押遺跡・妙義町下高田原遺跡群）。さらに区画内には、小規模な溝が伸びる（上原遺跡・原遺跡）。

2. 牧関連遺構

沼地 中原遺跡では、水飲み場と推定される。落合遺跡では、溜井が數カ所確認された。

工房 下塙田遺跡では大溝の西側で鍛冶工房址が4軒確認された（7世紀後半）。天神原遺跡と三本木Ⅱ遺跡では、大形台石をもつ工房址（皮革加工か）が確認された（8世紀～9世紀）。

調教関連施設 天神原遺跡では、「馬の洗い場」と推定される長屋状の遺構が2棟と調教用の馬場と推定される円形の柵列が確認された。同様な柵列（方形区画）は、中野谷松原遺跡でも確認された（8世紀後半以降）。

集落 横野台地は、他地域に比べ古代の集落が少ない地域である。7世紀代の集落は、堤下・北東遺跡（7軒）、細田遺跡（1軒）で確認された。8世紀代の集落は、堤下・北東遺跡（2軒）、向原Ⅱ・Ⅲ遺跡（7軒）、中野谷原遺跡（2軒）、加賀塚遺跡（1軒）、下高田原遺跡群で確認された。8世紀末から9世紀代の集落は、三本木Ⅲ遺跡（4軒）、和久田遺跡（3軒）、上原遺跡（1軒）で確認されている。集落規模は小さく時期も限定され、土器も少ないとから、一般的な居住地ではなく、牧の運営に従事した集団の居住地であったものと考えられる。また、8世紀代の住居址からは、比較的多くの畿内系暗文土器（土師器）が出土している。横野台地の北側、碓氷川右岸には、大規模な集落が存在する（大王寺地区遺跡群）。ここでは、約500軒以上の9世紀代を中心とする古墳時代から古代にかけての住居址及び掘立柱建物等の遺構が確認された。この集落では、農具をはじめとする鉄及び鉄器生産が行われている。また、公的施設の可能性が高い掘立柱建物群と関連遺物（瓦、円面鏡、墨書き土器等）の存在から、遺跡一帯が古代「磯部郷」の中心地に比定されている。

古墳 加賀塚遺跡、平塚遺跡、落合Ⅱ遺跡で確認された古墳（終末期）と旧東横野村7号墳（神明塚：年代不明）がある。加賀塚遺跡と7号墳は、牧区内に存在している点で注意する必要がある。

3. 牧の時期

細田遺跡では大溝が6世紀代の住居址を壊しており、7世紀代の住居址が大溝掘削時の堆土によって埋め戻されていた状況から、大溝の上限は7世紀代まで遡る可能性が高いと考えられる（大工原2001）。また、大溝には切り合い関係が認められる場所（下宿東遺跡、上宿南遺跡等）もあることから、区画溝には段階的に掘削、延長され、長期間にわたって構築されたものと思われる。時間差があることは、区内に終末期古墳が存在することと矛盾がない。牧の廃絶時期は、全ての大溝覆土上部に浅間B軽石が堆積している点と出土遺物から10世紀以前であったと考えられる（大工原2001）。牧の覆土状態から、人為的な埋め戻し後に再度掘削された場所（西向原遺跡、原遺跡等）も認められる。長期に渡って使用されたものと考えられるが、全てで大溝の浅間B軽石の堆積状況が類似することから、埋め戻しは短期間に行われたものと思われ、一気に廃絶されたものと推定される。いくつかの区画溝が同時に存在したものではなく、いくつかのブロック（区域）に分けられていたことを示すものである。また、和久田遺跡と上原遺跡では、区画外で牧廃絶後に構築されたと考えられる9世紀後半の住居址がある。向原Ⅲ遺跡の大溝と集落の関係では、8世紀前半には存在していたものと推定され、和久田遺跡の大溝と集落の関係により、9世紀後半には衰退したものと思われる。

4. 牧の時代的背景

牧を設置した理由について考古学的及び歴史的な背景をもとに検討する。牧の上限である7世紀代は、律令体制のもと地方支配が進められた時期である。後半には、すでに評制が導入されていたと考えられる「碓水評」として支配体制に組み込まれた地域である。

中野谷地区には古墳時代では、加賀塚遺跡において5世紀中頃から6世紀初頭にかけて大規模な集落が存在した。しかし、それ以降になると当地域では急激に衰退する。集落は台地上に広がる大王寺地区遺跡群に移り、平安時代まで継続して集落が営まれている。古代碓氷郡には、群領級の在地豪族である「石上部君氏」が支配したとされている。その後「上毛野坂本君」に改姓し、「朝臣」姓を与えられ勢力を拡大（吾妻郡）しながら中央へと進出した氏族である。また、同一郡内に東山道の駅家が2カ所ある点もこの地が交通の要衝であったことを意味している。「磯部」という地名からしても、この豪族との結びつきがあるものと推定できる。その力の強さから、私牧を集落に隣接して中野谷地区に置いたことは、歴史的背景から想定可能である。

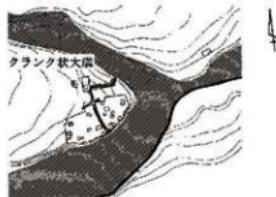
5. 特徴

本地区の遺構の特徴は、広範囲に区画される大溝とその周辺に点在する関連遺構に分けられる。

古代上野国には、8世紀前半には官牧が存在し、8世紀末から9世紀初頭に御牧9カ所が設置された。中野谷地区で確認された牧と類似する遺構は、渋川市半田中原・南原遺跡で認められる。ここでも方形に溝で区画された遺構が1カ所（推定約10万m²）確認された。区画内には遺構は存在せず、外側に同時期の住居址等の遺構がある。また、馬に関連する遺物も出土した。遺跡のある地域は古代「有馬郷」に比定され、「有牛」と墨書きされた土器も出土していることから、上野国御牧の一つ「有馬嶋牧」と想



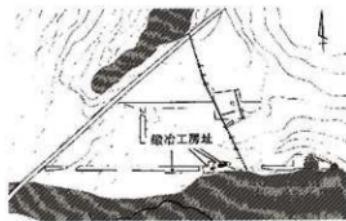
中原遺跡



下宿東遺跡



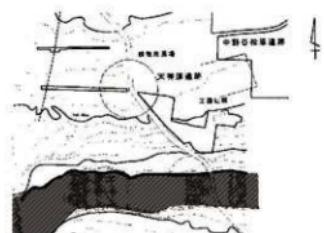
和久田遺跡・細田遺跡



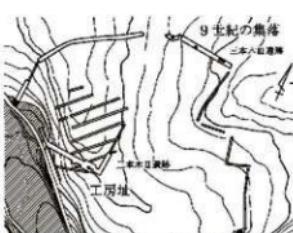
下塚田遺跡



注連引原遺跡



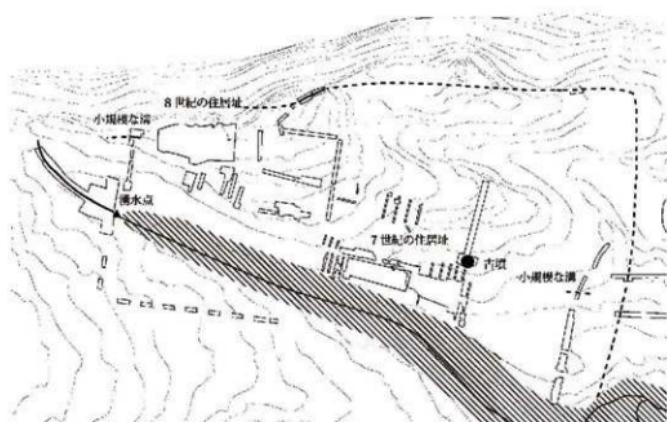
天神原遺跡・松原遺跡



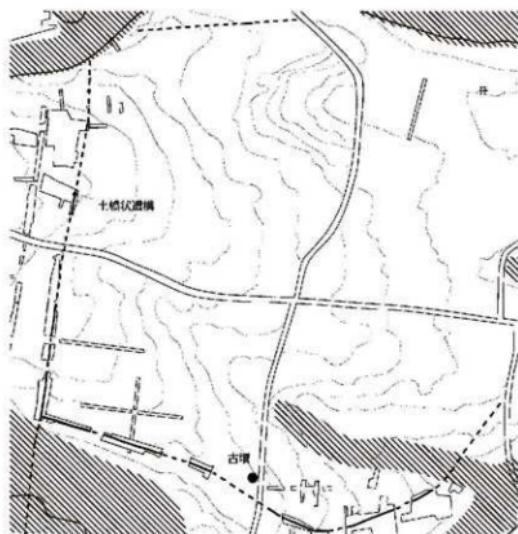
三木II・III遺跡

0 200m

第26図 中野谷地区遺跡群 牧関連遺構（1）



上北原・原・加賀塚・向山・天神原遺



細田・和久田・上宿南・砂押遺跡



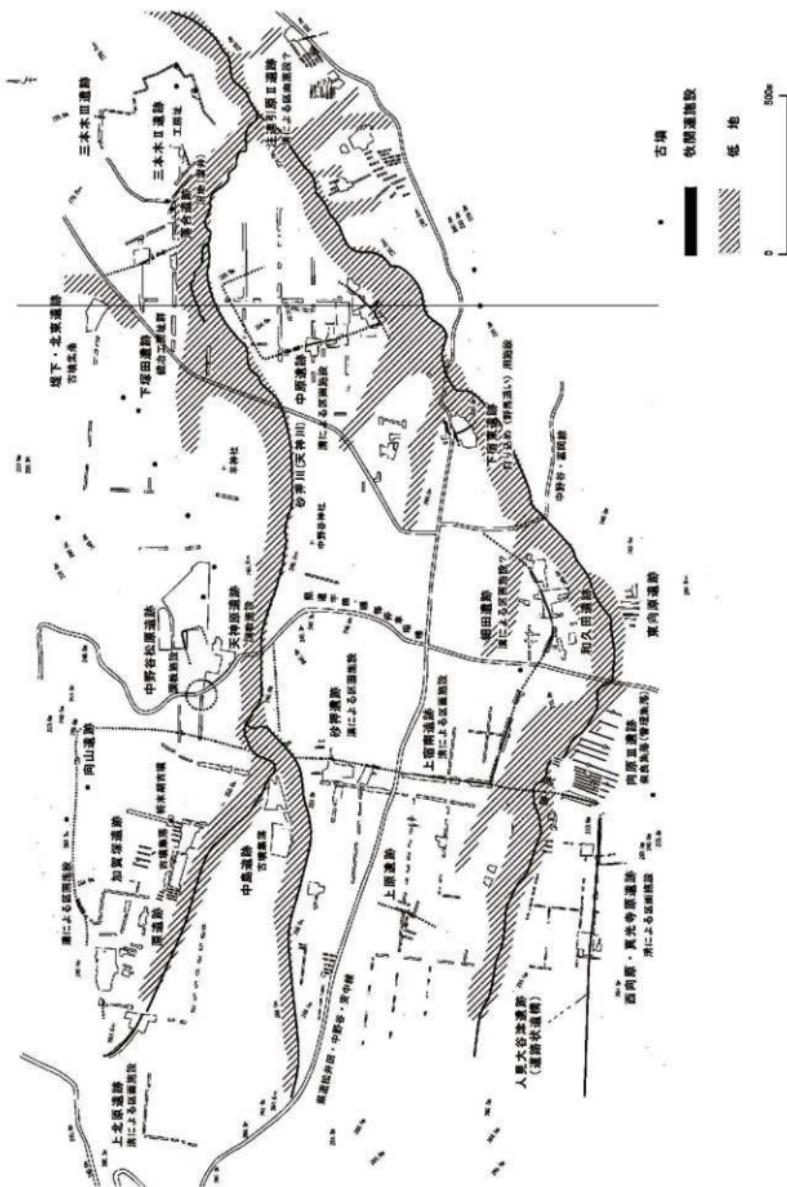
上原遺跡



向原・真光寺原遺跡

0 200m

第27図 中野谷地区遺跡群 牧園連遺構 (2)



第28図 中野谷地区道路群 牧則道編群全体図

定されている（大塚1994、高島1996）。また、伊勢崎市三和工業団地II遺跡では、東西に延びる大溝とそれに付随する「コ」の字形の区画溝及びそれらを区画する溝、「馬房」と推定される掘立柱建物群及び住居址が発見された。報告者はこれらの遺構群を牧の「放牧場」と推定している（福嶋2004）。ここで検出された大溝は、中野谷地区の大溝（M-1号溝）と規模、形態、埋設状態等に共通性が認められ、存続時期も一致する点があることから、牧の関連遺構である可能性は高いと判断される。しかし、東毛地区に牧の比定地が存在したとの記録はないため、中野谷地区と同様、記録にない私牧であったと考えられる。

上野国には、御牧が9カ所とそれに準じる官牧が存在することで知られているが、発掘調査で明らかにされたのは「有馬嶋牧」とされる半田中原・南原遺跡のみであり、中野谷地区遺跡群と三和工業団地II遺跡のものは、比定地にない牧と考えられる。古墳時代まで遡る牧については、渋川市（子持地区）で確認されており、大規模な馬の飼育が行われていたことを示す遺跡が多数調査されているが、古代まで存続したかについては、不明な点を残している。

中野谷地区遺跡群で発見された牧関連遺構群のうち、大溝については、今後、西横野地区（旧松井田地区）においてその延長先を大規模開発によって調査する予定である。約300ha以上に及ぶ規模をもつ牧について、さらに解明していくものと思われる。

（井上）

<参考文献>

- 前沢和之 1991 「上野国の馬と牧」『群馬県史通史編』第2巻 原始古代2 群馬県
津金沢吉茂・横尾好之 1993 「原始・古代編」『妙義町誌（上）』妙義町
大工原 豊他 1994 『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
大塚昌彦 1994 『半田中原・南原遺跡』渋川市教育委員会
高島英之 1996 「牧と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
高島英之 2000 「古代上野国の牧」『古代の牧と考古学 資料集』山梨県考古学協会
閑口功一他 2001 『安中市史』第4巻原始古代中世資料編
大工原 豊 2001 『中野谷地区遺跡群（奈良・平安時代）』『安中市史』第4巻原始古代中世資料編
壁 伸明 2002 『人見大谷津遺跡』松井田町教育委員会（現安中市）
福嶋正史他 2004 『三和工業団地II遺跡』伊勢崎市教育委員会
井上慎也 2004 『中野谷地区遺跡群2』安中市教育委員会
井上慎也 2004 『天神林遺跡・砂押Ⅲ遺跡・大道南II遺跡・向原II遺跡』安中市教育委員会
井上慎也 2007 『加賀塚遺跡1』安中市教育委員会

なお、V-1で扱った遺跡の各報告書については、紙面の都合上割愛した。

種類No.	番号	遺跡名	区	層	種類	器種	法算(km)	法算(km)	高さ	上端幅	下端幅	外側	成・整形技法の特徴		内面	時間
													表面	裏面		
第21回	1 H-1	11	2No.1	土師器	环	20.1	11.2	7.0	普通	相色	白色粒、褐色粒 青白粒、褐色	ほぼほん形	口縁部～体部削り、底部削り。	口縁部～体部削り、底部削り。	8世紀後半	
	2 H-1	15	2No.1	須邊器	环	14.6	7.6	4.5	還元	灰白色	褐色粒、褐色	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半		
	3 H-1	12*ベルト	2No.1	須邊器	环	14.4	8.8	3.9	還元	灰白色	黑色粒	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半		
	4 H-1	16	2No.1	土師器	环	13.2	8.1	3.9	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	欠損	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	5 H-1	11*ベルト	2+2*2	陶文土器 (土師器)	环	15.0	11.1	5.6	良好	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	3/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	6 H-1	11*P1	2	陶文土器 (土師器)	环	17.0	—	<4.5>	良好	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/6	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	7 H-1	8	2No.1	土師器	小形器	11.8	—	—	良好	褐色	白色粒、褐色粒 褐色粒	中16.1/3	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	8 H-1	罐内		土師器	焼	(22.1)	—	<7.5>	良好	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	9 H-1	15+11+15	2No.2*	土師器	焼	(26.8)	—	—	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半		
	10 H-1	14*ベルト	2No.1	土師器	焼	18.5	—	—	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/6	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	11 H-1	8+7+9+4	2+2	土師器	焼	(23.0)	—	—	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/6	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	12 H-2	9+2*9+1	3+2*	土師器	环	14.7	—	4.7	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/2	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	13 H-2	11サブトレ	3	土師器	台付器	—	(8.5)	—	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/3	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
第22回	1 H-2	15	2+3	土師器	鉢	(20.8)	—	<13.5>	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	半径1/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	2 H-3	D.1+罐内		陶文土器 (土師器)	环	13.7	7.9	3.7	普通	浅い相色～ 相灰色	白色粒、褐色粒 褐色粒	3/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	3 H-3	罐内		土師器	焼	(16.8)	—	<5.0>	普通	相灰色	白色粒、褐色粒 褐色粒	中16.1/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	4 H-4	16	3No.1	須邊器	环	11.9	8.2	3.2	還元	灰色	白色粒、褐色粒 褐色粒	はね穴形	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	5 H-4	16	3No.2	土師器	环	11.4	—	3.8	普通	相色～天色	白色粒、褐色粒 褐色粒	3/4	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	
	6 H-4	4	3	土師器	环	12.0	—	4.0	普通	相色	白色粒、褐色粒 褐色粒	1/2	口縁部～底 輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	輪郭整形、底部石錠斜糸切り。	8世紀後半	

第2表 遺物配列表（1）

第223号	7	H-4	4	3No.1	昭文土器 〔上部窓〕	环	(15.2)	11.3	4.8	普通	棕色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で後、歯付 撰文、底部被燒(同文)。	8世紀前半	
	8	H-4	12	3	土師器 小形壺	环	<8.3>	3.7	<3.2>	普通	棕色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	9	H-4	4	3	土師器 壺	环	22.2	—	—	普通	水褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	10	H-4	1.5	2-3	土師器 壺	环	22	<9.5>	—	普通	赤褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/3	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	11	H-5	8	3No.1	土師器 〔上部窓〕	环	10.9	—	3.6	普通	に点状褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	12	H-5	D-4	4	土師器 壺	环	12.8	—	3.6	普通	浅い褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	3/5	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	13	H-5	8	3No.2	土師器 〔上部窓〕	环	12.1	—	3.3	普通	褐色～ 浅い赤褐色	白色粒、石英 白色粒、石英	完形	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	14	H-5	12	3	昭文土器 〔下部窓〕	环	(14.3)	(9.2)	4.2	普通	褐色～ 浅い黄褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/3	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、歯付撰文。	8世紀前半	
	15	H-5	4+4+8*	2-3+2	須燒器 壺	环	18.8	18.8	5.1	24	還元	灰色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	2/3	輪轉變形、天井部白化を防ぐ。	歯付撰文。	8世紀前半
	16	H-5	7	3No.1	須燒器 〔上部窓〕	环	(16.5)	10.8	3.9	還元	灰色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	2/5	輪轉變形、底部白化を防ぐ。	歯付撰文。	8世紀前半	
第234号	17	H-5	16	3No.1	土師器 〔上部窓〕	环	10.1	—	7.4	普通	褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	完形	面部が焼れ調節不適應。	口縁部～全体被燒で、体部～底部 輪轉變形。	6世紀	
	1	H-6	1+1+6+1+10	2-1+2-1+10	土師器 〔上部窓〕	环	(9.9)	—	—	良好	浅い褐色～ 褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	輪轉變形、天井部白化を防ぐ。	歯付撰文。	5世紀前半	
	2	H-07	3	2No.1	土師器 〔上部窓〕	环	13.9	—	—	良好	褐色～ 褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	輪轉變形、天井部白化を防ぐ。	歯付撰文。	5世紀前半	
	3	H-07	3	2No.2	土師器 〔上部窓〕	高环	16.2	(11.6)	12.8	良好	明褐色	白色粒、角四石 白色粒、角四石	5/6	輪轉變形で後段が付加的調節。	口縁部～全体被燒で、体部～歯付 撰文。	5世紀前半	
	4	H-07	3	2No.5	土師器 〔上部窓〕	高环	21.0	16.2	18.7	良好	褐色～ 褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	7/8	輪轉變形で後段が付加的調節。	口縁部～全体被燒で、体部～歯付 撰文。	5世紀前半	
	5	H-07	3	2No.3	土師器 〔上部窓〕	小形壺	—	5.1	—	普通	浅い赤褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	1/2	輪轉變形で、体部～歯付 撰文。	口縁部～全体被燒で、体部～歯付 撰文。	5世紀前半	
	6	H-07	2	2No.1	土師器 〔上部窓〕	环	16.5	10.0	34.5	良好	褐色～ 褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	完形	輪轉變形で、体部～歯付 撰文。	口縁部～全体被燒で、体部～歯付 撰文。	5世紀前半	
	7	H-7	3	2No.4	土師器 〔上部窓〕	环	—	7.6	—	普通	褐色	白色粒、黑色粒 白色粒、黑色粒	2/3	輪轉變形で、体部～歯付 撰文。	口縁部～全体被燒で、体部～歯付 撰文。	5世紀前半	

凡例：（ ）は推定値 < >は残存値

第3表 遺物観察表(2)

測定箇所	番号	遺構名	区	層	断面	形態	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	所見	
第2498	1	H-4	14	3	刀子	鉄	<49.4>	—	(4.3)	<6.6>	基部部分、両刃、全面鋸。		
	2	H-1	8+12	2	鉛錐形	石	滑石	46.3	44	13.5	44.6	2点が複合、研磨により整形。	
	3	H-7	3+4	ペルト2	3	砥石	土上砥	滑紋岩	91.8	46.6	10.3	50.3	穿孔、複合資料、全面研磨、被熱變形。
	4a	H-2	8	3	砥石	土上砥	滑紋岩	94.2	48.9	36.1	251.7	2点に分割、全面研磨面。	
	4b	H-2	8	3	砥石	土上砥	滑紋岩	75.6	48.1	36.6	174.5	—	
	5	H-1	12	2%2	砥石	土上砥	滑紋岩	68.8	48.8	34.6	182	分割面あり、全面研磨面。	
	6	H-7	2	2	砥石	土上砥	滑紋岩	137.8	73.5	47.3	740.9	鐵打形、凹有、被熱。	
	7	H-2	2	3	石製品(刀)	刀	輕石	67.7	69	29.4	81.1	用途不明。	
	8	H-5	7	3	石製品(刀)	刀(刀身)	輕石	43.8	53	45.7	49	用途不明。	
	9	H-3	11	ペルト2	2	砥石	石英	30.1	18.1	12.9	10.3	白色。	
	10	H-7	4	2	搬入搬出	—	褐色岩	150.6	64.9	35.3	393.1	門扉あり。	
	11	H-4	15	2%1	搬入搬出	—	褐色岩	68.2	44.6	30.2	195	金属部による衝突痕あり。	
	12	H-6	3	2	搬入搬出	搬入搬出	褐色岩	157.8	28.7	20.9	161.4	自然離、使用痕なし。	
	13	H-5	8	2	土製品	粘土	41.6	29.1	24.5	11.7	長い黃褐色、數力所の刃形等孔痕、研磨調整痕あり、用途不明。		
	14	3J-144c	—	—	土割り盤	粘土	33.1	—	3.4	4.9	褐色、土跡沿縁底部を再利用、底部削除系切痕あり。		
	15	H-3	14	2	鉢口	圓状	粘土	<66.0>	—	<62.0>	69.9	褐色色、面撫で、溶合が付着。	
	16	H-3	8	3	鉢口	圓状	粘土	151.6	—	69.5	576.1	褐色～深い黃褐色、面撫で、先端部に沿岸が付着。	
未実測	H-3	1	3	砥石	土上砥	安山岩	122.5	64.5	44	370.9	—		
	H-4	16	3	砥石	土上砥	褐色岩	68.2	44.6	30.2	195	欠損		
	H-7	2	2	砥石	土上砥	安山岩	137.8	73.5	47.3	740.9	欠損		
	3X-143a	—	—	砥石	土上砥	滑紋岩	135.1	76.6	69.4	941.3	—		
	M-1#底	—	—	砥石	土上砥	砂岩	61.3	41.7	26.5	95.7	—		

凡例：() は推定値、< >は残存値。

第4表 遺物観察表(3)

古墳・奈良時代住居址観察表

(単位:m)

住居名	平面形態	規模			壁構	主軸方向	土成		柱穴	貼床	覆土	遺・創跡		時期
		長幅	短幅	深さ			前段	床下				位置	構造	
H-1	中形長方形	4.9	4.2	0.5	×	N 101°-E	×	×	3?	×	C	東中央	A	奈良
H-2	中形長方形	3.4	4.2	0.5	×	N 20°-E	電左	×	×	×	B1	武中央	A	奈良
H-3	小形正方形	3.4	3.2	0.4	×	N 96°-E	電右	×	×	×	A1	東南寄り	A	奈良
H-4	中形正方形	4.7	3.1	0.6	全開	N 10°-E	電右	×	4	×	A1	北／中央南寄り	A	奈良
H-5	中形長方形	4.7	3.4	0.5	×	N 103°-E N 13°-E	電右2	×	×	×	A2	北：東寄り 電左：東／南寄り	A	奈良
H-6	中形正方形	5	3.1	0.4	×	N 1°-W	南面開	×	4	×	A1	なし	—	古墳
H-7	中形	4.1	(4.1)	0.4	○	N 16°-E	南面開	×	不明	×	A2	不明	—	古墳

凡例 壁幅の() は推定値、< >は残存値。

覆土については「加賀塚跡」を参照。

電機造人はローム+黒色土

調査表

(単位:m)

遺構名	周縁			前面形態	時期	主軸	遺物	備考		
	長さ	幅(上)	深さ							
M-1	<110>	4.4	5.6	1.4	箱狀	古代	N 48°-E	土師器帯	切口面調査の一剖、法面及び底面に多數のビット。	—
M-2	<18>	1.2	0.4	圓状	古代	N 74°-E	土師器帯	M-1より新しい。	—	—
M-3	<6.4>	2.2	0.3	圓状	古代	N 92°-E	土師器帯	M-1より新しい。	—	—
M-4	<25>	1.6~2.0	0.3~0.4	圓状	古代	N 77°-E	土師器帯	M-1より新しい、傾曲している。	—	—
M-5	<16.4>	0.6	0.3~0.5	箱狀	古代	N 93°-E	土師器帯	M-1及びM-1より新しい、途中から深くなる。	—	—

凡例 () は推定値、< >は残存値。

遺物出土量 土器等: 0~1000g

第5表 遺構観察表(住居址・溝)

写 真 図 版

図版1



向原III遺跡 遠景



向原III遺跡 全景

図版2



H-1号住居址



H-1号住居址 遺物出土状況



H-1号住居址 遺物出土状況



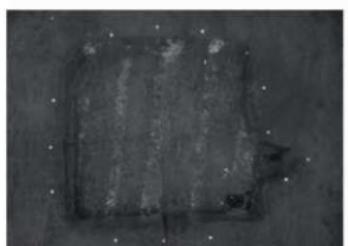
H-2号住居址



H-2号住居址 遺物出土状況



H-2号住居址 竪



H-3号住居址

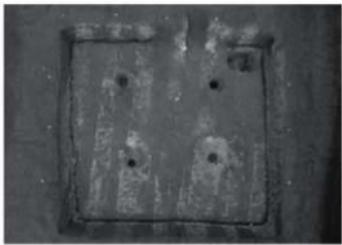


H-3号住居址 遺物出土状況

図版3



H-3号住居址 竈・D-1



H-4号住居址 竈



H-4号住居址 遺物出土状況



H-4号住居址 竈



H-5号住居址 竈



H-5号住居址 遺物出土状況

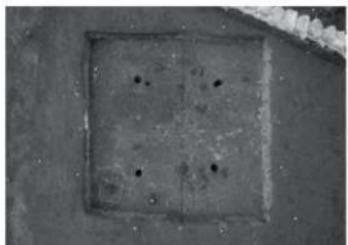


H-5号住居址 竈1・D-1



H-5号住居址 竈2

図版4



M-6号住居址



H-6号住居址 遺物出土状況



H-6号・H-7号住居址・M-5



H-7号住居址 遺物出土状況

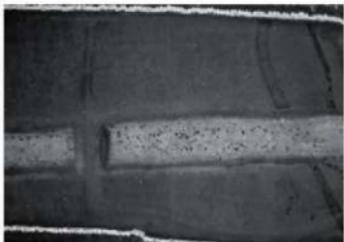


M-1号溝

図版5



M-1号溝 南



M-1号溝 中央



M-1号溝 北



M-1号溝 中央ベルト



M-2・3号溝



M-2号溝 西壁



M-4・5号溝



M-4号溝 西壁

图版6



H-1号住居址 坯 (1)



H-1号住居址 坯 (2)



H-1号住居址 坯 (3)



H-1号住居址 坯 (4)



H-1号住居址 坯 (5)



H-1号住居址 壶 (9)



H-1号住居址 壶 (10)



H-1号住居址 壶 (7)



H-1号住居址 壶 (11)



H-2号住居址 坯 (12)



H-2号住居址 台付壶 (13)



H-3号住居址 坯 (2)



H-4号住居址 坯 (4)



H-4号住居址 坯 (7)



H-4号住居址 坯 (5)



H-4号住居址 坯 (6)



H-4号住居址 壶 (9)



H-5号住居址 蓋 (15)



H-5号住居址 壊 (12)



H-5号住居址 壊 (17)



H-5号住居址 高台付壊 (16)



H-5号住居址 壊 (11)



H-5号住居址 壊 (13)



H-5号住居址 壊 (14)



H-6号住居址 増 (1)



H-4号住居址 売 (10)



H-7号住居址 壊 (2)



H-7号住居址 高壊 (4)



H-7号住居址 台付壺 (6)



H-7号住居址 高壊 (3)



H-7号住居址 小形壺 (5)



TP-2 (1)

TP-8 (2)



TP-4 (3)

TP-4 (4)



TP-7 (6)

H-6号住居址 (5)

図版8



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	むかいはらさんいせき
書名	向原Ⅲ遺跡
副書名	横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也・三浦京子
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 TEL 027-382-1111
発行年	西暦2007年(平成19年)11月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向原Ⅲ遺跡	安中市山野谷字向原・真光寺原・明戸 地内	102113	G-47	36°16'34"	138°51'16"	2006.10.23 ～ 2006.12.15	5,400m ²	工業団地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向原Ⅲ遺跡	集落・牧	縄文前・中期 古墳中期 奈良	居住址1 住居址2 住居址5 大溝1 溝4	深鉢、石器 土師器（环・甕） 土師器・須恵器（环・甕）、石製纺錘車、 鉄製品（刀子）、羽口、砾石	当地域に広がる古代牧園遺 道構である区画溝と同時期 の集落址を確認。

向原Ⅲ遺跡

—横野平工業団地分譲事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集—

発行日 平成19年11月30日
 編集・発行 安中市教育委員会
 群馬県安中市松井田町新堀245
 印刷 朝日印刷工業株式会社
 群馬県前橋市元総社町67